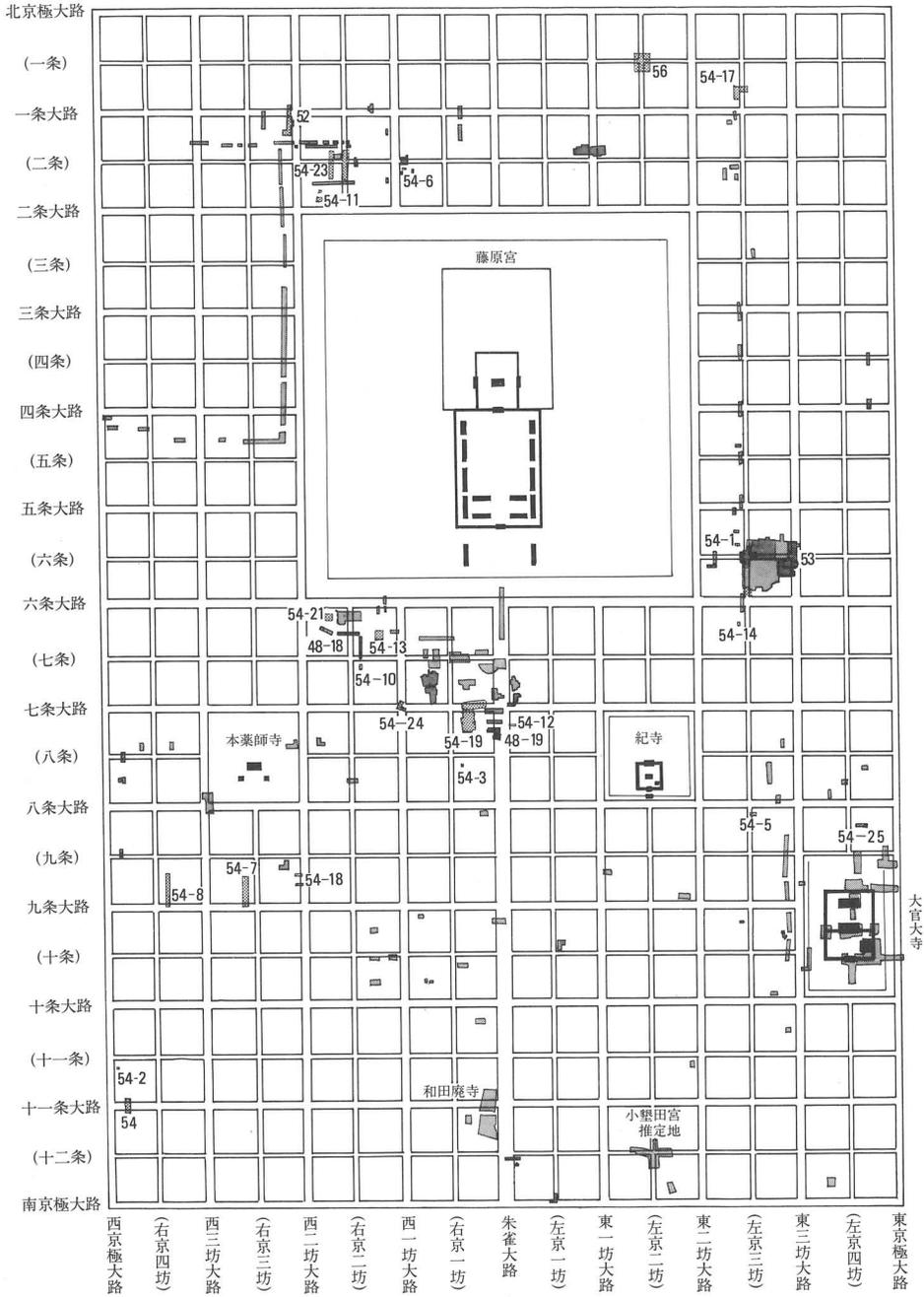


I 藤原宮・京の調査



第1図 藤原京内調査位置図（1：20000，網目は既調査地 条坊は模式図）

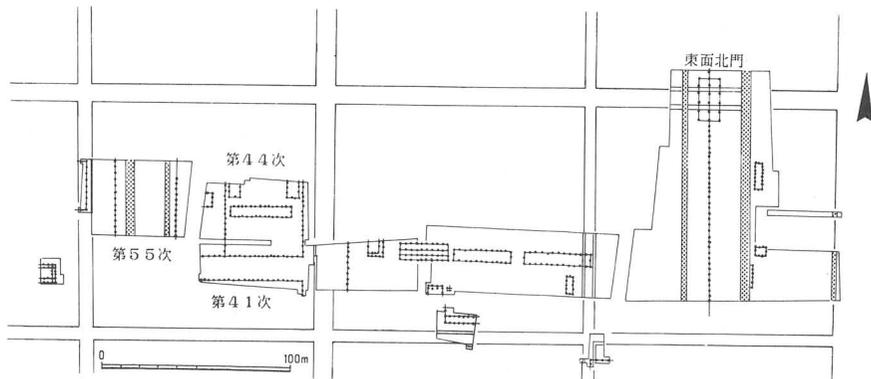
1. 藤原宮東方官衙・内裏東外郭地域の調査（第55次）

(1987年5月～12月)

藤原宮東方官衙地域では、1978年の第24次の宮東限区画施設の調査以来、宮中心部に向かって調査を進め、整然と配置された長大な建物群を確認し、さらに官衙を区画する塀の存在を初めて明かにした（概報9～11・13・15）。今回の第55次調査は以上の調査を受けたもので、調査地は官衙地区と内裏地区とにまたがる。内裏東外郭での調査は本調査地北の奈良県教育委員会による調査（奈良県教育委員会『藤原宮』）、および南の第4次調査（報告Ⅲ）が行なわれている。調査地の基本層序は上から耕土・床土・暗褐色砂質土（地山）であり、東側約10mの間は黄褐色粘質土の地山である。西半部は地山の上に暗黄灰色粘質土が一層ある。遺構は暗黄灰色粘質土と地山面で検出した。

1. 藤原宮期の遺構

検出した主な遺構は掘立柱塀・掘立柱建物・溝である。SA865は内裏東外郭の東を限る南北塀で、今回は14間分（40m）を検出した。柱掘形は一辺1m～1.5m、深さ0.6mで、柱はすべて西方向へ抜取られている。南北溝SD105はSA865の東5mにある宮内の基幹排水路（東大溝）であり、すでに上記の調査で確認している。幅4m、深さ0.8mで、堆積層は3層に大別でき、上層には遺物が少ない。中層には木炭・土器・瓦を多く含み、中層の下面に木片を含む層があり、その中から木簡が出土した。下層からは土器が多量に出土した。SA



第2図 藤原宮東方官衙地域調査位置図

865の西の内裏東外郭内にある建物SB6052は桁行8間・梁行2間以上の南北棟である。一辺1.5～2.0m、深さ0.8mの柱掘形で、円形の柱抜き取り穴がある。柱間寸法は桁行・梁行ともに3.0m等間である。南北塀SA6051は北端が南北溝SD6075の流路によりこわされている。東方官衙の建物がこの塀までで終わっているため、官衙区画の西限の塀と考えられる。第41・44次調査地には南北二つの官衙を区画する東西塀2条と南北塀2条があり、SA6051はこのうち北側の東西塀SA3630に接続して北の官衙を区画している可能性がある。ただし柱掘形はSA3630よりやや小さく、柱間寸法も相違がある。東西棟建物SB3897は西側柱をSA6051と共有し、西から3間分を検出した。東から2間分は第44次調査ですでに検出しており、桁行7間・梁行3間と推定される。北側柱列西から3番目の掘形には柱根が残る。南北溝SD850はSA6051の西3.5mにあり、幅1.5m、深さ0.6mで、堆積土は2層に大別できる。調査区南辺にのみ残り、北側は後述の南北溝SD6075でこわされる。SD850は第4次調査で検出しているが、今回と比べると幅が2.4mと広い。

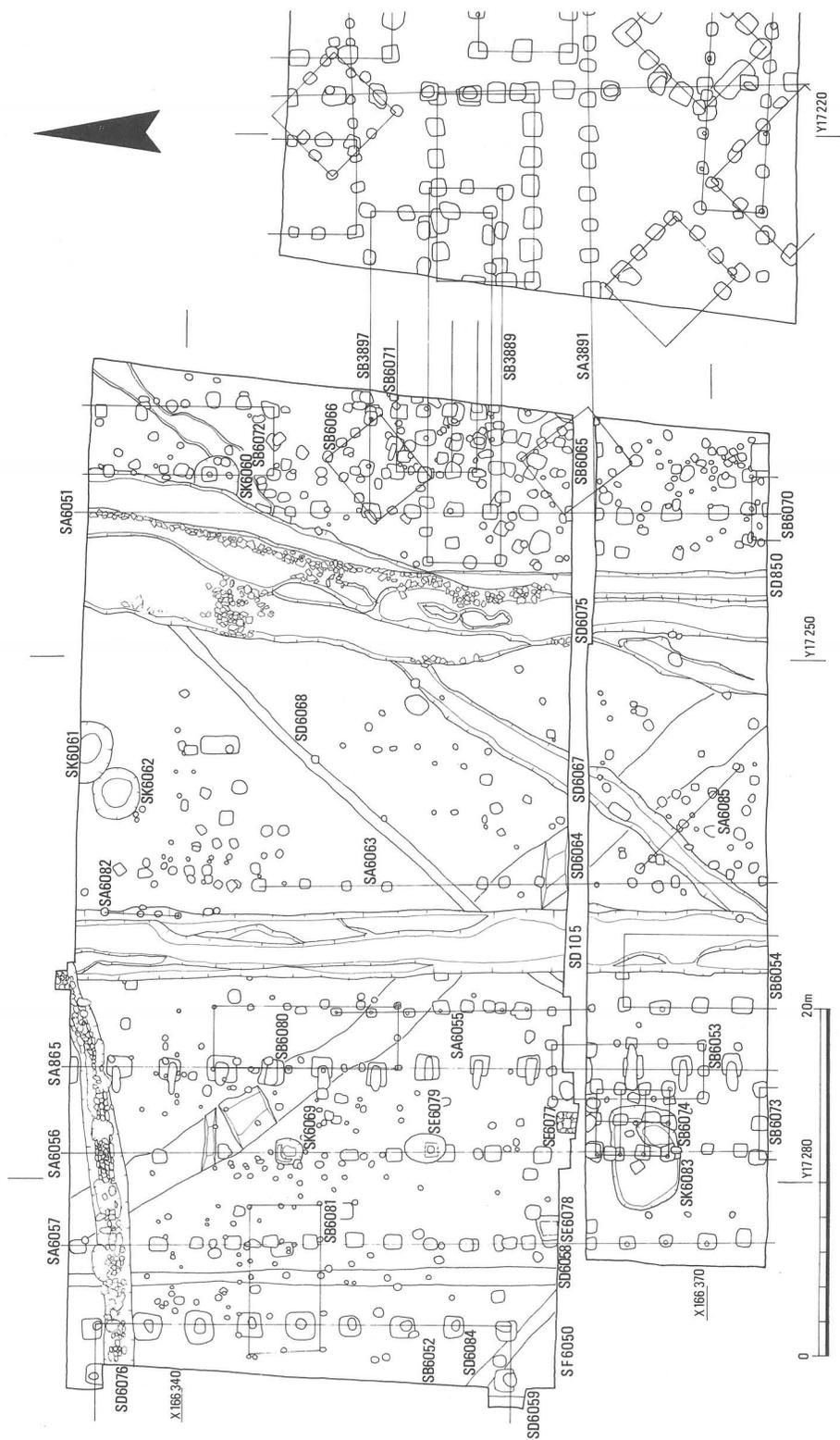
2. 藤原宮期以前の遺構

弥生時代・古墳時代の遺構と7世紀代の遺構がある。

弥生時代の遺構には、調査区の東南から西北に斜行する大溝SD6064がある。幅は最大3.5m、深さ0.8mで、堆積土は3層に分かれ、中層から弥生時代後期の土器が多量に出土した。

古墳時代の遺構は掘立柱建物・溝・土坑がある。建物・溝はいずれも方眼方位に対しほぼ45度振れている。SB6065は桁行4間・梁行3間と推定される。SB6066は桁行3間・梁行3間である。第44次調査地でも同方位の古墳時代の建物を多数検出したが、今回の建物より規模が大きく整然としており、様相が異なる。溝SD6067は幅1.2～2.0m、深さ0.5mで、堆積土は3層あり、最下層から6世紀代の土器が多量に出土した。溝SD6068は幅0.5m、深さ0.15m、堆積層は一層で、南端は削平を受けている。北西部にあるSK6069は南北1.5m、東西1.5mの不整形の土坑で、6世紀代の土器が出土した。

7世紀代の遺構には掘立柱建物・掘立柱塀・道路・溝・土坑がある。東西棟



第3図 第55次調査遺構配置図(1:400)

建物SB3889は第44次調査地で東端を検出しており、梁行2間で、桁行は11間と推定される。東西塀SA3891も第44次調査からつづく塀で、本調査地で4間分を検出したが、後述の奈良～平安時代の溝SD6075より西では検出していないため、SD6075・SD850付近で北へ曲がるものと考えられる。そうであればSB3889は「コ」の字状の区画内の建物となる。南北棟建物SB6053は桁行4間・梁行2間である。南北棟建物SB6054はSB6053の東にあり、東側柱筋はSD105によりこわされている。桁行4間以上・梁行2間で、南は調査区外に延びる。その東の南北塀SA6063は削平のため欠けている柱穴があり、北端も不明である。南北塀SA6057は一辺約1.0mの掘形を持ち、柱間2.1mの整然とした塀で、18間分を検出した。道路SF6050は条坊計画道路の東一坊坊間路にあたり、東西両側溝を伴う。東側溝SD6058は幅1.0m、深さ0.4m、西側溝SD6059は幅0.85m、深さ0.2mで、溝心心距離は7.2mを測る。SK6060は径2.6mの円形土坑で、深さ1.1mである。7世紀中頃の土器、馬骨が出土した。土坑SK6061は調査区北端で南半を検出した。円形とみられ、南北長3.5m、深さ1.4mで、土器・斎串・ヒョウタン等が出土した。SK6061に接するSK6062は径3.0mの円形土坑で、深さ0.8mである。両土坑とも7世紀後半であろう。

3. 藤原宮期以後の遺構

奈良・平安時代の遺構で、掘立柱建物・塀・溝・井戸・土坑がある。東西棟建物SB6071は身舎の桁行3間以上・梁行2間で、南庇がつく。南北棟建物SB6070は2間の北妻を検出しただけである。東側柱筋がSB6071の西妻と揃う。南北塀SA6056は柱間寸法が1.7mから3.5mまで差があり、掘形の規模も一様でない。以上の遺構は出土遺物等から奈良時代と考えられる。

南北棟建物SB6072は桁行5間以上・梁行2間である。南北棟建物SB6074は桁行3間・梁行2間の総柱建物である。柱間寸法は桁行1.4m・梁行2.0mである。南北棟建物SB6073はSB6074の南にあり、北妻2間だけを検出した。SB6080は桁行5間・梁行2間の南北棟建物で、柱掘形は小さく、掘形内に石が1～3個入るものがあり、根巻石状に用いたのであろう。東西棟建物SB6081は桁行4間・梁行2間で、小さい掘形である。南北9間の塀SA6055は掘形の

規模・柱間寸法にばらつきがある。

井戸SE6077は一辺0.5m、深さ0.55mの縦板組で、下端部四面に内側から棧をあてて枳板を固定している。掘形は一辺1.2mの方形で、井戸枳の周囲に人頭大の石を積んでいる。井戸SE6078は一辺0.7m、深さ0.8mの縦板組であるが、東辺には枳板は残っていない。隅柱を立て、底から0.2m上の枳穴に横棧をさしこんで枳板を固定する。埋土から隆平永宝（796年初鑄）が6枚出土した。掘形は一辺1.4mの方形である。井戸SE6079は一辺0.8mの縦板組で、南辺東西に隅柱が残る。井戸底中央に径0.5mの曲物をすえる。深さは約1mである。掘形は長径1.2mの楕円形である。

南北溝SD6075は開削時は幅2m、深さ0.5mで、奈良時代中頃の溝であることを調査区南端部で確認した。その後、氾濫をくり返し、北方では溝幅が大きく広がっている。その状況を示す玉石による簡単な護岸が何条か残る。最上層は平安時代中頃の遺物を含む。溝中には玉石が多量に散在しており、最初は玉石で護岸していたのであろう。第4次調査地では南北溝SD850の西2mに南北溝SD852が並行しており、西岸斜面に護岸の玉石列があり、溝中にも多量の玉石が散在していた。幅2m、深さ0.55mで、位置・規模からみるとSD6075の当初の溝と近似しており、SD6075はSD852の延長部の可能性もある。第4次調査ではSD852を藤原宮期の溝と考えたが、再検討の必要があろう。石組東西溝SD6076はやや北東に斜向しながらSD105を越えて東流する。溝幅1.5m、深さ0.5mで、掘形の幅は2mである。側石一段が残り、底には扁平な石を敷く。土坑SK6083は東西6m、南北4m、深さ0.5mである。以上の遺構は平安時代に入ると考えられるが、SB6080・SB6081・SE6079・SK6083はさらに平安時代中頃に降るとみられる。

4. 出土遺物

土器・土製品・瓦・木簡・木製品・銭貨・金属製品・石製品・ガラス玉等があり、その多くはSD105・SD6075等から出土した。

土器では縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・施釉陶器（緑釉・灰釉陶器）・製塩土器の他、墨書土器が出土した。第5図はSD105

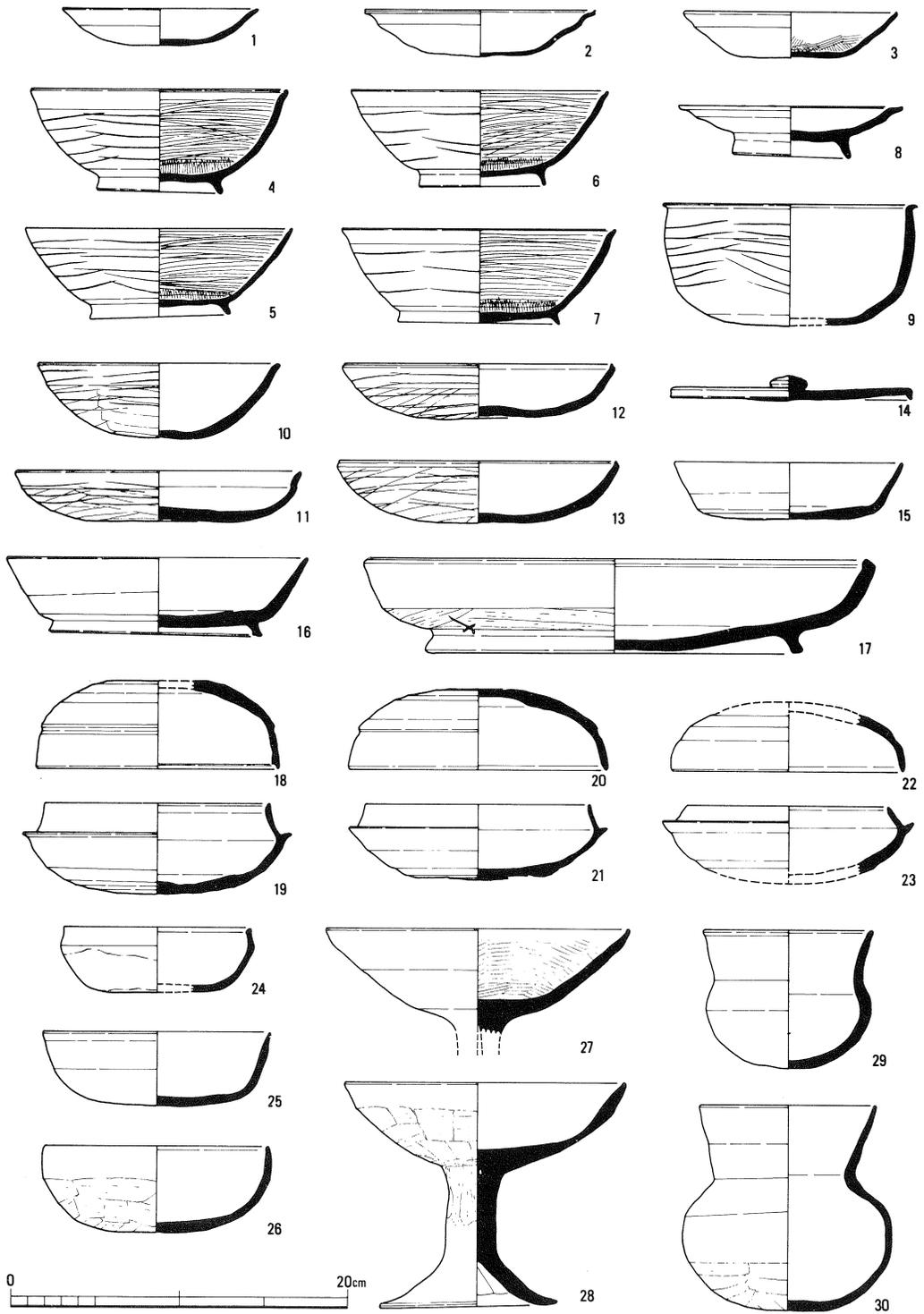
・SD6067・SK6083の出土品である。SD105の土器については第4次調査出土品を藤原宮期の基準資料として報告しており、今回、良好な資料を追加することができた（報告Ⅲ）。SD105からは他に墨書土器1点（土師器皿、判読できず）、土馬1点等が出土した。SD6067出土土器は6世紀前半～後半にかけての時期に属する。SK6083出土土器は10世紀前半の良好な資料である。SD6075からは奈良～平安時代の多量の土師器・須恵器の他、灰釉陶器・製塩土器・陶硯・土馬等が出土した。

瓦はSD6075を中心に出土しているが、その量は少ない。軒瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・隅木蓋瓦などがある。軒瓦は藤原宮式が大部分である。隅木蓋瓦は特異な形態で、第24次調査出土の藤原宮鬼瓦（概報9）と類似する重弧文をもつ（第4図）。

銭貨にはSE6078出土の「隆平永寶」6枚、SD6075出土の「万年通寶」1枚、金属製品にはSD6075出土の帯金具など銅製品の他、刀子・鉈等の鉄製品がある。石製品には砥石・紡錘車・管玉・有孔円盤・石鏃・剥片刃器等がある。木製品はSK6061から斎串が出土している。



第4図 隅木蓋瓦（1：5）



第5図 出土土器 (SK6083 1~9, SD105 10~17, SD6067 18~30; 土師器 1~3・
8・10~13・17・24~30, 須恵器 14~16・18~23, 黒色土器 4~7・9)

木簡はSD105から35点出土したが、ほとんどが断片で、主なものは隠岐国および評制下（国評名未詳）の貢進物荷札等である。

5. ま と め

今回検出した調査区東端の南北塀SA6051は東方官衙地域の西限の塀と推定でき、第41・44次調査で検出した官衙区画の東限南北塀SA3631との距離は66mで、大尺750尺の $\frac{1}{4}$ となる。また、この官衙区画の北限が、東面北門から西への宮内道路までとすると、同じく第41次調査で検出した官衙区画の南限の東西塀SA3630との間の南北長は88m（250大尺）となり、藤原宮で初めて一つの官衙区画の規模が推定できることになる。

南北溝SD850は官衙区画の西に沿っており、SA6051とともに官衙地域を区画する施設であろう。SD850と南北大溝SD105との間約18mは藤原宮期の顕著な遺構のない空闲地であり、南北方向の道路と解することもできる。

内裏東外郭を限る塀SA865から西15mに、内裏外郭内の掘立柱建物としては規模の大きいSB6052がある。平城宮では内裏東外郭内官衙地域であり、藤原宮でも同様であることが考えられるが、東方官衙地域の他の建物と比べると柱間寸法・柱掘形とも大きい。

この地域は藤原宮期直前の時期にも建物や塀などがあり、特に東西塀SA3891はL字状に北へ折れてSB3889等の建物を囲む可能性がある。これらの遺構は飛鳥浄御原宮の時期の官衙的性格の施設か、藤原宮の造営に関連し、先行して使用されていた建物である可能性が考えられる。

藤原宮の廃絶後も、この地域には平安時代前期頃まで整った建物群や石組溝が存在する。これらの遺構の位置づけとしては、平城宮への遷都後も引続き何らかの公的施設が置かれていた可能性と、平安時代初期には藤原宮の一部が荘園化していたため、その関連の施設の可能性が考えられる。

2. 藤原宮西方官衙地域の調査（第51・57次等）

（1986年12月～1987年12月）

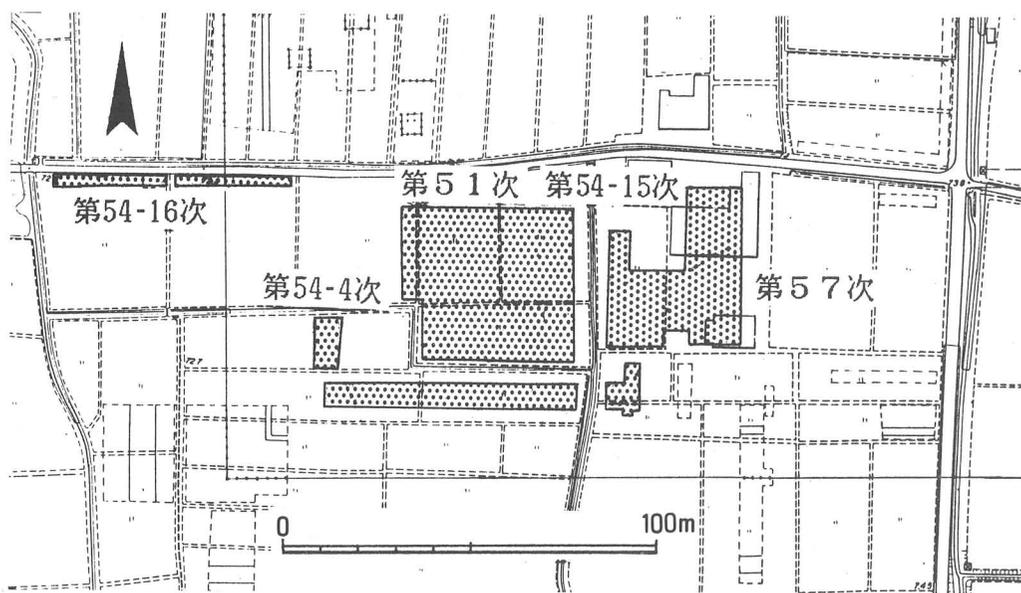
A. 藤原宮西南辺地域の調査（第51・57次、54-4・15・16次）

これらの調査はいずれも橿原市の宅地造成と、それに関連する道路工事などに伴って、橿原市四分町で行ったものである。

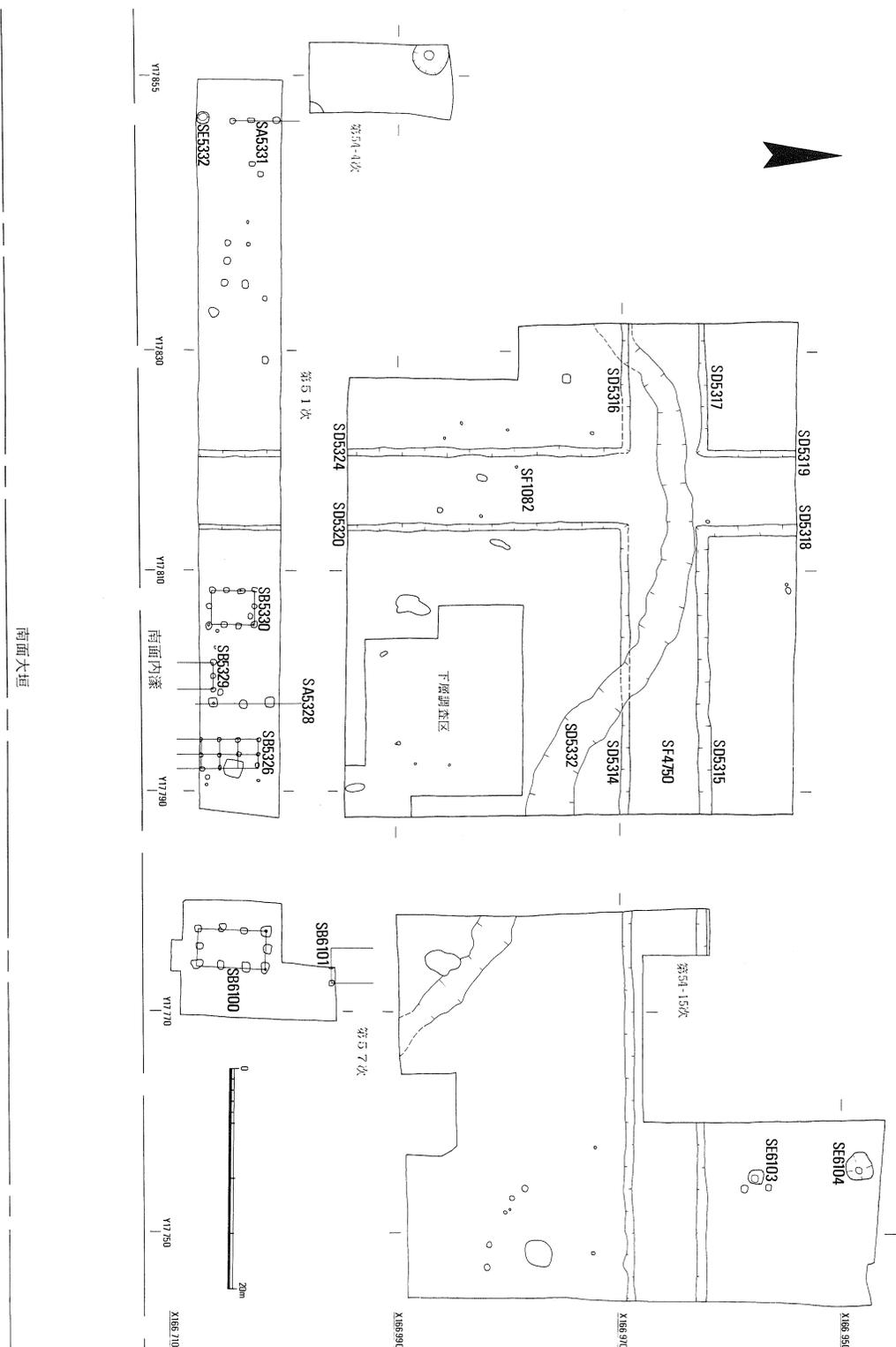
調査地域は藤原宮西南辺にあたる。この地域のこれまでの主な調査は今回調査地の南西（第34次）と北西（第10・26次等）で行われている（報告Ⅱ・Ⅲ、概報9・12）。第34次では宮域の外郭施設である大垣・内濠・外濠の西南隅を検出している。また、第10・26次などでは建物遺構は少なく、7世紀後半～藤原宮期の小規模な掘立柱建物・塀が存在するにすぎない状況である。

今回の調査では、特に第51・57次は発掘面積も広く、宮西南辺の遺構状況の把握、条坊計画道路の検出などのほか、この一帯が弥生時代の大規模な遺跡（四分遺跡）であることから、下層の弥生時代の遺構の検出も目的の一つとして行った。以下、各調査の結果について述べる。

なお第51次の下層調査では、弥生時代の土壌を抽出し、花粉分析を実施した。



第6図 藤原宮西南辺地域調査位置図



第7图 藤原宮西南辺地域遺構配置图 (1:600)

その結果について、天理参考館学芸員の金原正明氏よりご報告いただいた。

(1) 第51次

(1986年12月～1987年4月)

調査は東西水路をはさんで北側に東西45m・南北40mの北区、南側に東西67m・南北8mの南区を設けて行った。調査地は南面大垣から南区まで約17m、西面大垣から南区まで約27mの位置である。北区東南部で下層遺構の調査を行ったので、以下、上層遺構と下層遺構とにわけて調査結果を述べる。

① 上層遺構

調査区の基本的土層は上から水田耕土(約0.2m)・床土(約0.4m)で、その下は北半が茶褐色粘質土、南半が暗茶褐色粘質土となり、これらの土層の上面で上層遺構の検出を行った。

上層で検出した遺構は古墳時代から中世におよぶが、その主要なものは掘立柱建物3棟、掘立柱塀1条、井戸1基、道路2条、土坑1基、自然流路1条などである。建物・塀は南区のみで検出し、北区には全く存在しなかった。

7世紀後半の遺構 条坊計画道路である西二坊坊間路SF1082と六条条間路SF4750と、その交差点部分を検出した。両道路とも、幅約0.6～1.0m、深さ約0.1～0.4mの側溝を伴い、交差点部分でL字状につながる。溝心心距離は、坊間路では交差点の北側は7.0m、南側は6.8～6.9mとやや異なる。条間路では約7.0mである。坊間路の幅の違いは、東側溝の位置が交差点の北側と南側で約0.2mずれが生じていることに起因する。交差点北側の坊間路東側溝とこれにつながる条間路北側溝は、幅約1.0m、深さ0.3～0.4mと、他の部分に比して幅が広くかつ深い。側溝からの遺物はごく少量であるが、7世紀後半から藤原宮期の土器が出土した。

藤原宮期の遺構 掘立柱建物SB5329・5330は両者ともに南北棟建物と考えられる。SB5329は北側柱2間分のみを検出した。柱間寸法は1.3mである。SB5330は桁行3間・梁行2間の建物で、柱間寸法は桁行約1.4m・梁行約1.5mである。SA5331は南区西端部にある南北塀で、柱間寸法は1.5～1.7mと不揃いである。SE5332はSA5331の南にある円形の素掘り井戸で、径1.2m、深さ0.9mあり、藤原宮期の土師器・須恵器などが出土した。

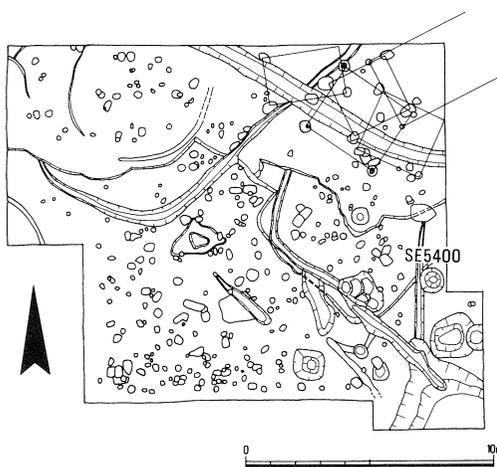
古墳時代の遺構 北区の中央で、弧状をなす自然流路SD5332を検出した。幅3～3.5m、深さ0.6mである。

中世の遺構 南区東半部で建物SB5326を検出した。桁行3間以上・梁行2間の総柱の南北棟で、柱間寸法は桁行約1.5m・梁行約1.3mである。東側柱の一つは土坑で壊されている。

② 下層遺構

下層遺構の調査は上層遺構の状況から、北区の東南部分に東西15m、南北14.5mの調査区を設定して行った。基本的な土層は上から順に暗茶褐色粘質土（約0.3m、中・後期弥生土器を含む）、黒色粘質土（約0.3m、中期弥生土器を含む）、黄灰色粘質土（約0.25m、中期弥生土器を含む）、そして黄褐色砂質土（地山）となる。下層遺構は黒色粘質土の上面と、黄褐色砂質土の上面で竪穴住居跡・掘立柱建物・溝・土坑・井戸等を検出した。地山の高低でみると、調査区は基本的に約0.2mぐらいずつ差のある3つの平坦面からなっている。西南側が高く、東北側が低いため、飛鳥川に沿って伸びる微高地の東北斜面に調査区を設定したのであろう。

遺構の時期は弥生時代の前期から後期におよんでいる。このうち前期と後期に属するものは少なく、中期に属するものが大多数を占めていた。この中で次に報告する中期後半の竪穴住居跡は、特筆すべきものである。



第8図 第51次調査下層遺構図（1：300）

竪穴住居跡は調査区の西北隅で検出し、直径約5.5mの円形のものである。中央に一辺約0.5m、深さ約0.35mの不整形のいわゆる中央ピットを備え、中央ピットから約1.5m外側に、合計6つの柱穴がめぐっている。柱穴は中心方向に少し傾けて掘り込まれていた。住居跡の壁は、南東部分に高さ約0.3m残っていた。この部分に、幅約15cm、深さ約4cmの周溝が壁に沿ってめぐる。床面は平坦で、貼り床な

どはなされていない。この住居跡の外側約1.5～2.0mに、幅約0.5m、深さ約0.4mの溝が南側と東側に掘り込まれており、屋根や外側からの水を排水する役割をはたしていたとみられる。

柱穴の大きさや深さ、それに溝のあり方からみて調査区の西南部、すなわち最も高い所にはこのような竪穴住居が幾度にもわたって建て替えられていたと考えられる。一方、調査区の東北隅、すなわち最も低い所には、直径が約0.4～0.5mにおよぶ柱穴が多い。これは先ほどみた竪穴住居跡の柱穴より格段に大きく、柱根が残っていたものをみると、直径が27cmに達していた。ここを中心に、特に太い柱を必要とする中期後半もしくは後期前半の掘立柱建物が集中的に建てられたとみてよいだろう。

井戸は調査区の東南部分に集中していた。

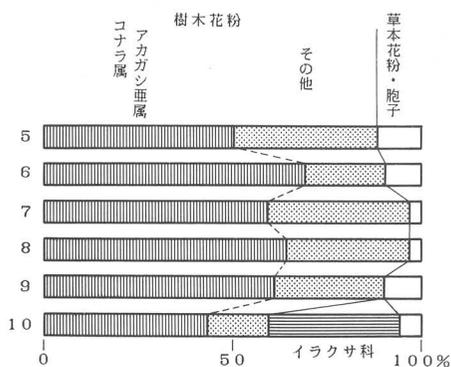
遺物は多量の土器とともに、石器と骨角器が多量に出土した。

四分遺跡（藤原宮第51次調査）の花粉分析

四分遺跡における弥生時代の古環境を推定復元するため、花粉分析による検討を行った。採取試料の新鮮な部分より1cm³かその整数倍の堆積を取り出し、水酸化カリウム処理・傾斜法による砂粒の除去・フッ化水素酸処理・アセトリシス処理を施し、適時グリセリンゼリーによるプレパラートを作製し検鏡した。

弥生時代後期の井戸SE5400内の堆積物からは比較的よい結果が得られた。SE5400内の堆積物は、黒灰色から暗灰色を呈する泥で、下位では砂質で植物遺体や腐植を多く含み、上位では粘質土となる。試料採取は10cm毎に12層準（上位より試料1～12）でブロック状に行った。試料5～10では比較的花粉が多く産した。主要花粉の相対的な産出傾向は第9図のようである。コナラ属アカガシ亜属が最も優占し、試料10でイラクサ科が高率となる以外、他に目立った産出を示す花粉はない。

本遺跡の植物環境は、カン類などの常緑広葉樹を主とする森林の多い環境であったと推定される。他にモミ属・ツガ属・マツ類・スギ・ヒノキ科の針葉樹、クレーシイノキ属・ナラ類・ニレーケヤキ属・エノキームクノキ属・トチノキ



第9図 SE5400花粉分析結果

・クルミーサワグルミ属の広葉樹は周辺地域の普遍的な森林要素であり、イラクサ科・イネ科・カヤツリグサ科・セリ科・ヨモギ属は周辺に生育していたと考えられる。コナラ属アカガシ亜属とイラクサ科は、花粉粒がしばしば塊で産するため、花粉粒が直接的に堆積域であるSE5400にもたらされうる近接した地点に生育していたと考えられよう。イラク

サ科の花粉は著しい層位的変化を示すが、植物環境の変化とみるより、イラクサ科に夏～秋咲きの種類が多いことと近接した生育を考慮すると、季節性を反映している可能性がある。井戸などの遺構内の堆積物の検討はほとんど行われていないため、その堆積物の性格や特異性は明らかでなく、系統だった調査研究が必要であろう。

(金原正明)

(2) 第57次・54—15次

(1987年10月～12月)

調査地は第51次調査区と南北道路を挟んだ東側一帯である。第57次は対象地区南側の小溝を挟み、北区と小面積の南区とを設けた。第54—15次調査区は第57次北区の西北隅に接続する。

調査区の堆積土の状況は第51次調査区とほぼ同様で、水田耕土・床土下(表土下約0.6m)は西南部及び東北部が暗茶褐色粘質土、中央部分は茶褐色粘質土となり、これらの上面で遺構検出を行った。検出した遺構は掘立柱建物2棟、井戸2基、道路1条、自然流路などである。また、北区西南部で行った下層遺構の調査では小穴群・斜行溝・自然河川などを検出した。

建物は第51次同様、南区のみで検出し、北区には建物遺構は存在しなかった。

SB6100は桁行3間・梁行2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行2.1m・梁行1.8m等間である。東北隅柱穴には柱根が残る。若干方位が北で東に振れる。時期の決め手はないが、第51次の建物同様、南面内濠のすぐ北に位置することからすれば藤原宮期の建物の可能性もあろう。掘立柱建物SB6101は南側柱1間

分だけを検出し、柱間は約1.5mである。時期は不明である。

井戸SE6103・6104は調査区東北部にあり、いずれも素掘りである。SE6103は一辺約1.3mの隅丸方形で、深さは約1.2mである。堆積土より須恵器壺の完形品を含む藤原宮期の土器類が少量出土した。SE6104は径約2.5mの不整円形で、すりばち状を呈する。深さは約1.3mで、7世紀後半から藤原宮期の土器類が少量出土した。

道路SF4750は条坊計画道路の六条条間路で、第51次検出遺構と連続する。南北両側溝は幅約0.8～1m、深さ0.3～0.4mで、溝心心距離は6.5～6.8mを測る。溝埋土からは7世紀後半から藤原宮期の土器が少量出土した。

自然流路SD5332は第51次検出遺構に連続する古墳時代の流路で、第57次調査区ではごく浅いものとなっている。

下層では、自然流路SD5332の西岸の線にほぼそろえて、東南から西北方向へ斜行する弥生時代の自然河川の西岸を検出した。堆積土中からは弥生時代後期主体の土器が完形品を含め多量に出土した。今回の調査では対応する東岸については明確にできなかったが、土層観察と一部の掘り下げによれば、幅20～25mに達するものと思われる。この河川のため、今回の調査区内での弥生時代の生活面は狭く、後期の斜行溝や中期の小穴群を検出したにとどまった。

(3) 第54—4次

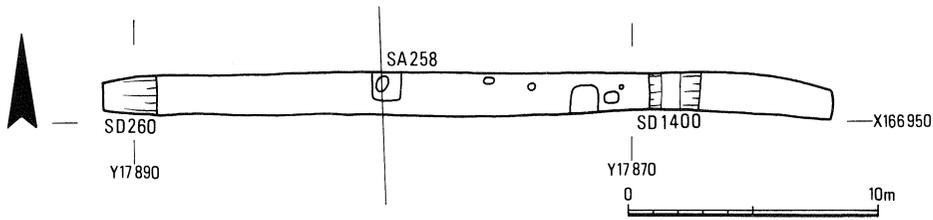
(1987年6月)

調査地は第51次調査区の西側である。調査は東西6m・南北10mの調査区を設定して行った。検出した遺構は調査区の西北隅と東南隅の弥生時代後期の2基の土坑だけで、藤原宮に関する遺構は検出できなかった。出土遺物には弥生時代後期の土器のほか、石槍・偏平片刃石斧・砥石などがある。

(4) 第54—16次

(1987年11月)

調査地は宮大垣西南隅から北約80m、西面南門推定地と宮西南隅のほぼ中間に位置し、西面大垣・内濠・外濠の存在が予想された。調査は南北2m・東西30mの東調査区と南北2m・東西27.5mの西調査区を設けて行った。検出した主な遺構は西面大垣SA258・内濠SD1400・外濠SD260である。SA258は東調査区の中央で一辺約1.2mの柱穴を1箇所検出した。SD1400は東調査区



第10図 第54—16次調査東区遺構配置図（1：300）

の東側で検出し、幅 2 m、深さ 0.75 m である。SD260 は東調査区西端で東肩を検出し、西肩は西調査区では検出できず、さらに西方に広がっている。SD260 は上層ではげしく氾濫しており、その幅が今調査区では 35 m 以上となる。SD260 は調査地の制約から、埋土上面を確認するにとどまった。

藤原宮西南辺地域調査のまとめ

今回、第51・57次及びその周辺の調査によって、藤原宮西南辺地域の様子がかなり明かとなってきた。第10・26次などの調査結果と合わせてみると、宮西面南門から南の宮西南辺には官衙としてまとまった建物群は存在しない。第51・57次の北区には全く建物はなく、第26次の建物まで南北幅約60m、東西幅は西面内濠から第57次調査区まで約130mの空間には建物が存在しない。宮西面中門を入った南側の一帯は、これまでの調査によって長大な建物から構成される官衙を検出しており、この西方官衙は平城宮馬寮との類似性が指摘されている。西方官衙地域の南限は宮西面南門までが想定されているが、今回の調査結果からすれば、宮西面南門以南の一帯も広場として、西方官衙に附属する空間であった可能性も考えられよう。

また、今回の調査区では条坊計画道路である、六条条間路と西二坊坊間路の交差点を検出し、今後の条坊復原にとって貴重な資料を加えることができた。交差点の状況は各側溝がL字状につながるものである。

今回の調査のもう一つの大きな成果は、小範囲ではあったが、下層遺構の調査を行ったことである。その結果、弥生時代中期の竪穴住居跡、大河川などを検出し、当時の集落のあり方を知る重要な知見をえた。

B. 藤原宮西方官衙の調査

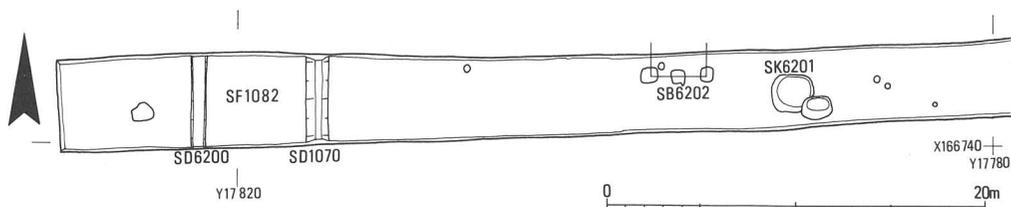
(1) 第54—9次

(1987年8～9月)

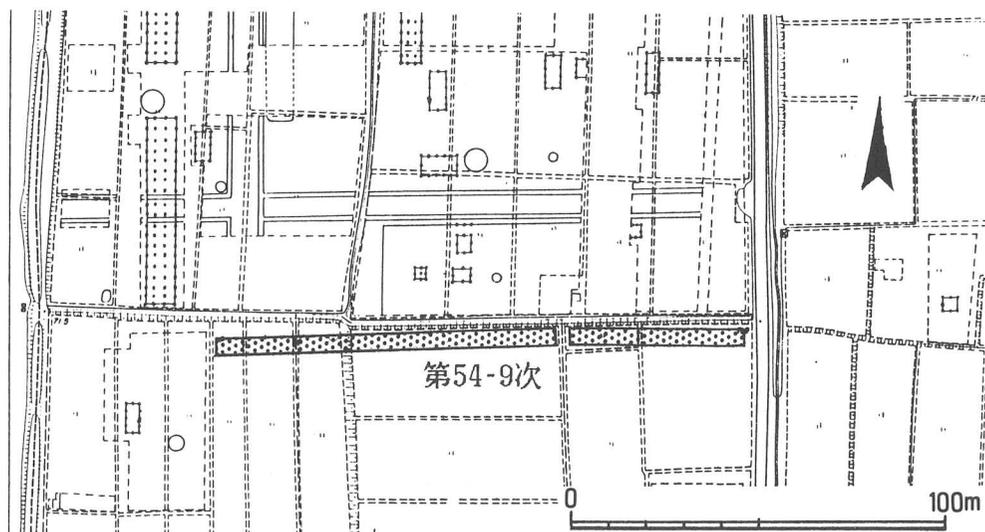
この調査は橿原市立鴨公幼稚園への進入道路建設に伴う事前調査として、橿原市縄手町で行ったものである。調査地は藤原宮西方官衙地区の一画で、かつて鴨公小学校建設に先だって実施した第5～9次調査（報告Ⅱ）、鴨公幼稚園運動場建設に伴って実施した第33次調査（概報12）の調査区に近接している。

調査は道路予定地内に東西140m・南北4mの調査区を設けて行った。調査区の層序は上から耕土・床土・暗黄褐色粘質土の順である。遺構はその下の灰褐色粘質土・茶褐色粘質土・灰褐色砂質土上面で検出した。

土坑SK6201は径2.0m、深さ0.2mの円形の浅いもので、調査区のやや西よりで検出した。埋土からは藤原宮期の遺物が多量に出土している。



第11図 第54—9次調査西半部遺構配置図（1：400）



第12図 藤原宮西方官衙地域調査位置図

調査区の西端で、藤原宮直前の遺構である西二坊坊間路SF1082の宮内延長部とその両側溝SD6200・1070を検出した。SF1082の幅は側溝心心距離で約6.4m、路面幅は約5.4mである。西側溝SD6200は幅約0.7m、深さ約0.25mで、東側溝SD1070は幅約1.3m、深さ約1.1mと西側溝に比して著しく深くなっている。約25m北で検出したSD1070は深さ約0.4mであるため、そこから南へ急に深くなることになる。SD1070からは土師器・須恵器・瓦・木製品・曲物等が出土している。

SD1070の東約17mで掘立柱建物SB6202の南側柱を検出した。梁行2間、柱間は1.5m等間の南北棟建物で、一辺約0.8mの掘形である。時期は7世紀後半と考えられる。

この他に、古墳時代の自然流路や中世の耕作に伴うとみられる小溝群等を検出している。

今回の調査では、西二坊坊間路の東側溝が西側溝よりも非常に深く掘られていることが明かとなった。これまでの藤原京の条坊に関する調査で、両側溝のうち一方が深く掘られる傾向にあることが判明しており、今回の調査結果もそれを追認することになった。しかし、今回の調査結果ほど、両側溝の深さに差はないことから、今後の資料の増加を待って検討したい。

(2) 第48—17次

(1987年2月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、檀原市縄手町で行ったものである。調査地は大極殿の北にある醍醐池の西、内裏西外郭の西方約100mの場所で、藤原宮西方官衙にあたる。また、条坊計画道路の西一坊大路の推定位置でもある。調査は南北2m・東西9.5mの調査区を設けて行ったが、東南から西北に流れる幅4mの10世紀代の自然流路を検出するにとどまった。

3. 左京六条三坊の調査（第53・54—1次）

（1987年2月～5月）

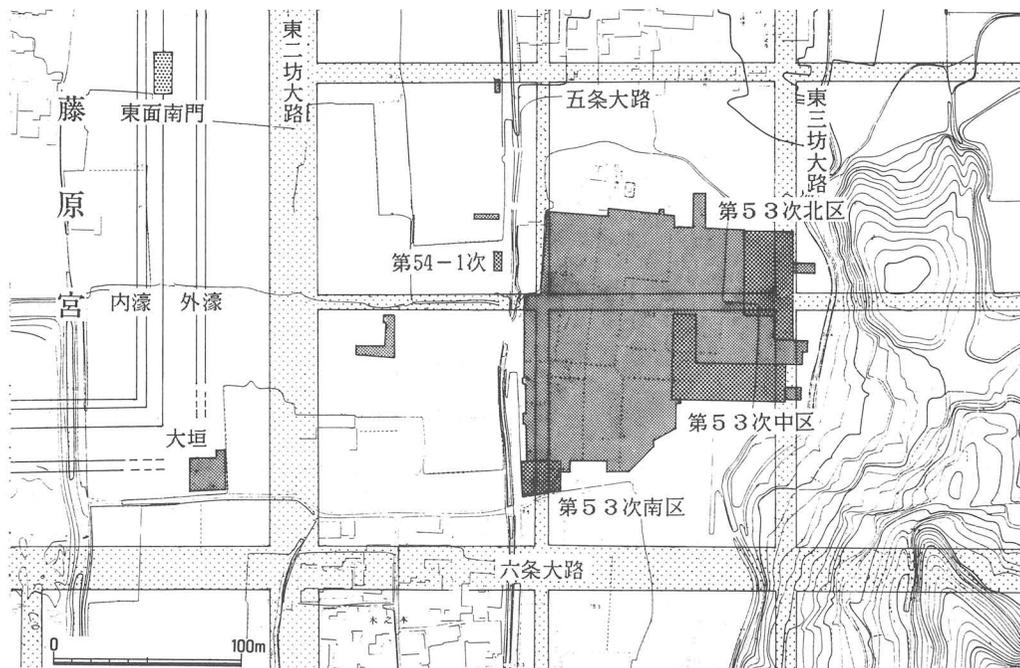
1. 第53次調査

この調査は橿原市木之本町の当調査部の新庁舎予定地において行ったものである。当該地の調査は1985年から4次にわたって実施し（概報16・17）、今回で調査面積は対象地区の8割強に達した。今回の調査は第45次の東に北区、第46次の東に中区、第46次の西南に南区を設けて行い、これまでの調査区がほぼ連続した。調査区の基本的な層序はこれまでと同様で、耕土・床土・灰褐色砂質土・茶褐色粘質土（地山）の順である。以下、各区ごとに概要を述べる。

(1) 北区

北区は庁舎予定地の東北で、香久山西裾を北流する中の川のすぐ西側である。調査区は東西約22m・南北約55mで、一部第45次調査区と重複し、南側は第50次東区と接する。

調査区は東半が、約1.5mほど低くなる。西半は茶褐色砂質土、東半は地山



第13図 左京六条三坊調査位置図

である茶褐色粘質土上面が遺構検出面である。今回の調査区であらたに検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟、井戸2基、土坑、自然流路などである。SB5925は桁行2間・梁行2間の小規模な南北棟建物で、柱間寸法は1.5～2.1mと不揃いである。柱穴からは12世紀の土器が出土した。SE5920は径1.4mの円形の素掘り井戸で、深さは1.2mある。奈良時代後半の土器の他、キヌタが出土した。井戸SE5940は南北大溝SD4143の上層堆積土を掘りこむ。一辺約0.6mの方形の縦板組で、深さは約1.5mある。12世紀の土器が出土しており、SD4143上層と接近した年代が考えられる。SK5930は径約1mの円形土坑で、11世紀初頭の土器類が出土した。調査区北西隅の土層観察で下層に斜行する古墳時代の流路を確かめたが、流路の砂中に伐採した自然木の集積部分SX5922を検出した。この流路は第46次検出の自然河川SD4225とつながる可能性もある。

その他、北区では東西堀SA4121・南北大溝SD4143・東西溝SD4132などこれまでの調査区からつづく遺構を検出した。南北大溝SD4143は西岸付近を約55m確認した。上層からは12世紀を主体とする遺物が出土した。前回までに検出している7世紀後半の方形区画の外側をめぐる東西堀SA4121は東へ1間分のびた。藤原宮期の東西大溝SD4130に注ぐ南北大溝SD4131に向かって西流する東西溝SD4132を東に約5.5m検出した。また、45次調査区の西側で、六条条間路の北側溝SD4139に連続すると考えていた溝は、今回の調査区では南方へ曲線を描くように曲がり、堆積土中に瓦器を含むことから、新しい時期であることが判明した。

(2) 中区

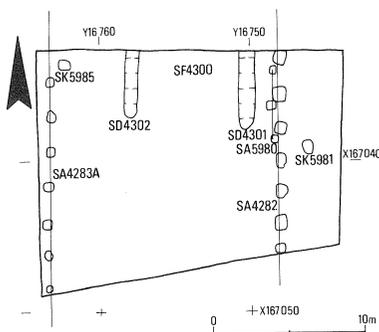
第50次東区と第46次調査区との間に、一部第45次調査区と重複してL字状の調査区を設定した。西半は茶褐色砂質土、東半は茶褐色粘質土上面が遺構検出面である。あらたに検出した掘立柱建物5棟、堀1条、井戸1基の他に、これまでの調査区から連続する掘立柱建物1棟、溝3条を検出した。

藤原宮期の遺構 井戸SE5950、大溝SD4143がある。SE5950は短径1.5m・長径2.0mの楕円プランをもつ素掘りの井戸である。地表下0.9mまではスリ鉢状で、それ以下は垂直に掘り下げ、深さ2.5mで砂層に達する。井戸枠等の施設は

出されている。溝SD4083・4084は第45次調査地からつづく素掘りの東西溝で、西へ延びて第46次では北へ屈曲し、それぞれSD4225・4226と合流する。SD4083は幅1.0～1.1m、深さ0.2m、SD4084は幅0.5～0.6m、深さ0.1～0.2mである。

中世の遺構 掘立柱建物SB5955・5965・5971、塀SA5972がある。SB5955は桁行3間（5m）・梁行1間（2.1m）の南北棟建物である。SB5965は桁行1間（3.4m）・梁行1間（2.6m）の東西棟建物で、北側柱を第45次調査で検出している。SB5971は桁行3間（5.2m）・梁行2間（4.2m）の身舎に北庇がつく東西棟建物である。

(3) 南区



第15図 第53次調査南区
遺構配置図（1：500）

南区は第46次調査区の西南隅に接する位置に、東西約20m・南北約15mの調査区を設けた。遺構は茶褐色砂質土上面で検出した。検出した主な遺構には、掘立柱塀・南北道路・土坑の他、中世小溝等がある。

藤原宮期の遺構 いずれも第46次で検出した遺構と一連のものである。南北塀SA4282は6間分13mを検出した。南北塀SA4283Aは7間分16mを検出し、両者ともさらに南へ延びる。南北道路は東三坊坊間路SF4300で、東・西側溝SD4301・4302を伴う。溝心心距離で7.3mを測る。側溝の幅はSD4301が1.0m、SD4302が0.8mで、遺存状況が非常に悪く、調査区北端から南5m付近までしか検出できなかった。

7世紀の遺構 南北塀SA4282の西に接する南北塀SA5980を2間分（4m）検出した。他に土坑SK5981、さらにこれよりもやや古いと思われる土坑SK5985がある。

まとめ

今回の調査は、これまでの調査の補足的なものであり、前年度の報告でまとめた全体の調査成果についての変更はない。南区では4町占地時期である藤原京B期の官衙的建物配置からみて、建物群の南を限る施設の検出が期待されたが、広場としての空間はさらに南まで続くようである。中区では既調査区で検

出している南北堀SA4320の東側に藤原宮期の井戸SE5950を検出した。SA4320の東側はSD4143までの約70mにはまとまった藤原宮期の建物群は存在せず、南北に広い空地となっている。これまで藤原宮期の井戸はSA4320の西側の建物群の中にあるSE4335のみで、SE5950はこの時期の2基目のものである。井戸の少ないことはこの遺跡の性格と関連するのかもしれない。

北区と中区では南北大溝SD4143を新たに約64m確認したので合わせて約93mを検出したことになる。多少曲折はあるが、西岸はほぼ直線的に通る。上層は12世紀までの遺物を含むが、第50次調査で下層に奈良時代およびそれ以前の遺物を含む砂礫層を確認している。今回の調査によって、この溝が藤原京東堀河であった可能性が強まった。

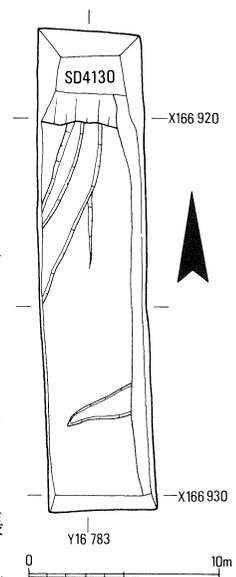
2. 第54—1次

(1987年4月)

この調査は作業場新設に伴う事前調査として行った。調査地は左京六条三坊西北の坪にあたり、第50次調査（概報17）で検出した東西大溝SD4130の西延長部の検出が予想された。調査は東西3m・南北12.8mの調査区を設定して行った。

調査区の北端で、東西溝を南岸から幅2.6m分検出した。南岸が2段になること、および堆積土の状況はSD4130と一致する。しかし、想定位置より約10m北へずれるため、本調査地と第50次との間、約20mで溝が屈曲していたとみられる。深さは1.6m、堆積土は3層あり、上・中層は奈良時代、下層は藤原宮期のものである。

遺物は中層の青灰色粘土から木簡1点が出土した。「尾張国海部郡魚鮪三斗六升」と記した付札である。ほかに、パルメット押捺文軒平瓦、山田寺系の単弁8弁蓮華文軒丸瓦（四天王寺と同範）が出土した。付近に7世紀中頃の寺院が存在したことを窺わせる。



第16図
第54—1次調査
遺構配置図（1：200）

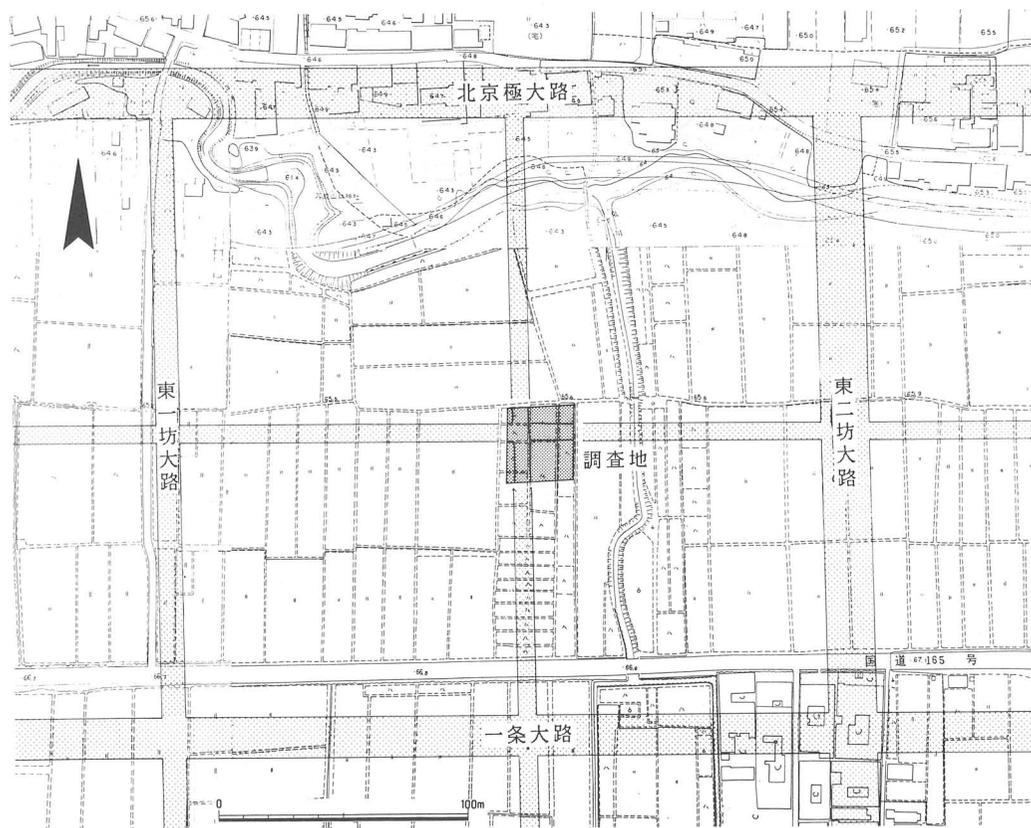
4. 左京一条二坊の調査（第56次）

（1987年5月～6月）

この調査はレジャー施設建設に伴う事前調査として、橿原市法花寺町で行ったものである。調査地は左京一条二坊のほぼ中央部にあたり、調査は東西27m・南北30mの調査区を設定して行った。遺構は地表下0.3～0.8mの暗灰褐色微砂質土上面で確認したが、この層は調査区東南部ではやや粗砂が多くなる。

検出した遺構には、藤原宮期の東二坊坊間路と一条条間路とその交差点・塀、藤原宮期以前の自然流路・土坑、藤原宮期以降の小溝・土坑等がある。ここでは藤原宮期までの遺構について報告する。

遺構 藤原宮期の遺構としては東二坊坊間路SF6030と一条条間路SF6035と、その交差点を調査区中央やや西北よりで検出した。両者とも両側に素掘りの側



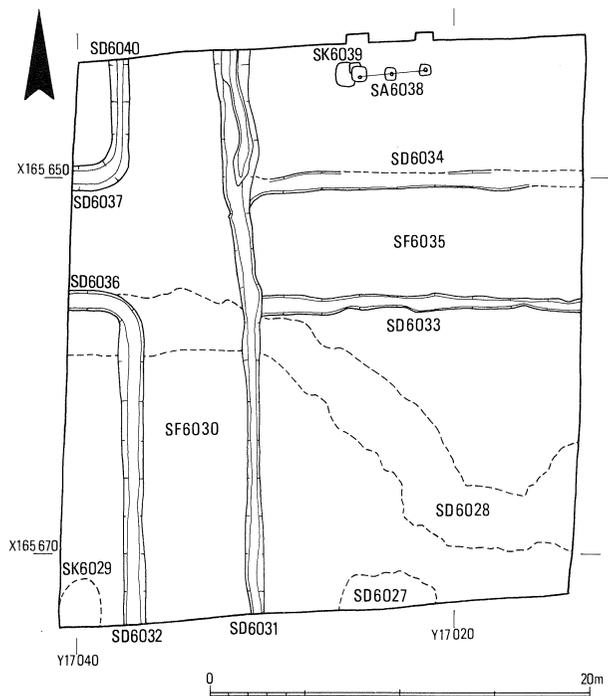
第17図 第56次調査地周辺図

溝を伴う。SF6030の溝心心距離は約6.5m、路面幅は5.5m内外で、約30m分を確認した。東側溝SD6031は幅1.0～1.5m、深さ0.2～0.4mで、北流し交差点ではSF6035の南・北側溝SD6033・6034が合流する。この合流地点から北では、SD6031は水流のため、南に比して幅が広くかつ深くなっている。西側溝SD6032・6040はともに幅1.2m、深さ0.2mで、交差点で西へL字に屈曲し、それぞれSF6035の南・北側溝SD6036・6037となる。条間路SF6035は、坊間路SF6030と同規模で、約27m分を確認した。SD6033・6034は交差点以東のSF6035の南・北側溝で、幅はともに0.7～1.0mであるが、深さは数cmしかなく遺存状態が悪い。交差点以西の南・北側溝はSD6036・6037である。調査区の西端では、SD6036は幅1.0m、深さ0.3m、SD6037は幅1.2m、深さ0.2mである。なお、南側溝SD6033とSD6036は溝心軸を概ね同じとするが、北側溝SD6034とSD6037では一致せず、食い違う。

条間路北側溝SD6034の北約6mの位置で東西塀SA6038を2間分検出した。柱間は2.7m等間である。条間路とほぼ平行することから藤原宮期の遺構と考えられる。

SK 6039 は SA 6038 の西端の柱穴に切られる土坑で、7世紀代の遺構であろう。

自然流路SD6028は調査区東南隅から西北上し、坊間路両側溝に切られつつ調査区の西へ延びる。灰色粗砂が堆積しており、出土した土器には縄文時代と弥生時代のも



第18図 第56次調査遺構配置図（1：400）

のが少量ある。幅2.0～3.5m、深さ約0.2mである。

SD6027はSD6028と同質の灰色粗砂が検出されている。SD6028と同様な自然流路であり、時期もそれと同時期であろう。

土坑SK6029は調査区西南隅で検出した。藤原宮期の遺構面で検出したが、出土遺物から弥生時代の土坑と考えられる。

遺物 縄文時代から中世に至るものが出土した。土器の大半は坊間路側溝から出土した藤原宮期の土師器・須恵器である。土製品では円面硯・土馬が出土している。また、藤原宮期の丸・平瓦が少量出土した。

まとめ 今回の調査では、東二坊坊間路・一条条間路の交差点（以下「交差点」とする）を検出し、藤原京北半部において、条坊を復原するうえで重要な資料を得た。ここでは既知の条坊遺構を参照しながら、今回の調査成果のまとめを行っておく。

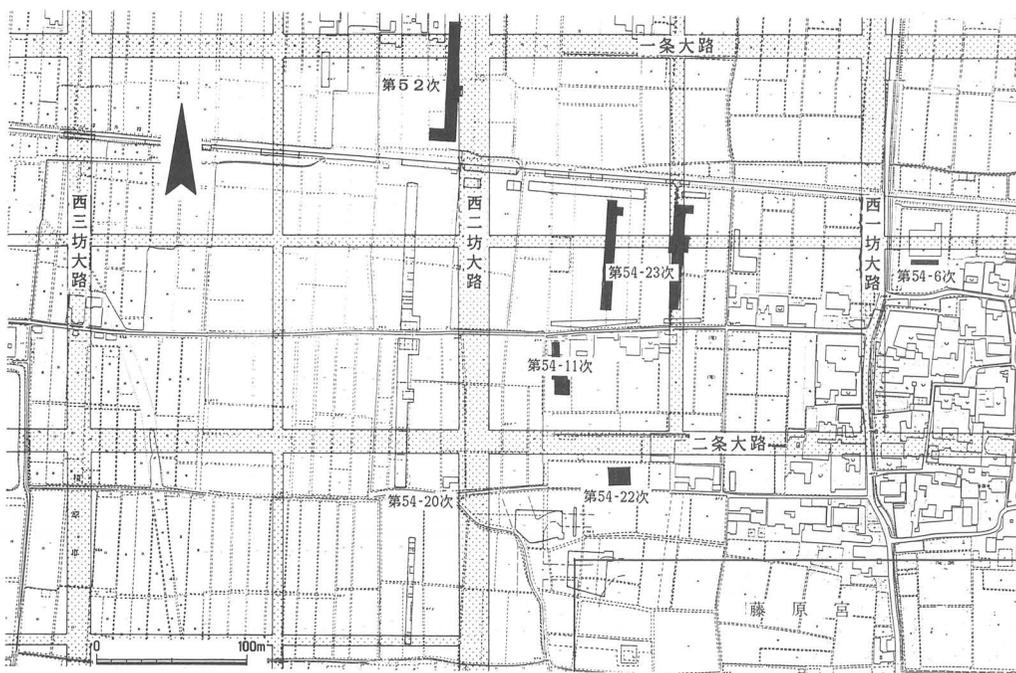
「交差点」から東一坊大路心（第48次調査、『藤原京左京二条一坊・同二条二坊調査報告』）までの距離は140.6mある。また、宮東方官衙地区で検出した先行条坊での東一坊大路・東二坊坊間路間でも141.1mの数値が得られている。これらの数値は、藤原京で推定されている1町約132mよりも長いものである。一方、南北方向では、二条大路と東二坊坊間路の交差点（推定）から「交差点」までの距離は383.7mとなる。この数値から1町分の距離を求めると127.9mとなり、従来の推定距離よりも短くなる。しかし、これらの数値は道路心心間のものである。他の藤原京で検出した隣接した道路における道路心心距離を見ると、130m弱のものと、135m前後のもの二群に分かれる傾向が認められる。このようなことは、藤原京の条坊設定の方法が、実態のより明確になっている平城京での道路心心間の距離を450尺で割り振っていくという方法とは異なっていたためと考えられる。また、今回の調査等で確認できた1町の数値の大幅な相違は、藤原京各条坊の振れが6分から1度前後までと偏差が大きく、平城京条坊の10分から20分程度の振れと比して、安定していないことに起因するのかもしれない。これらの解明については今後の周辺地域の調査の進展をまちたい。

5. 右京二条三坊の調査（第52次）

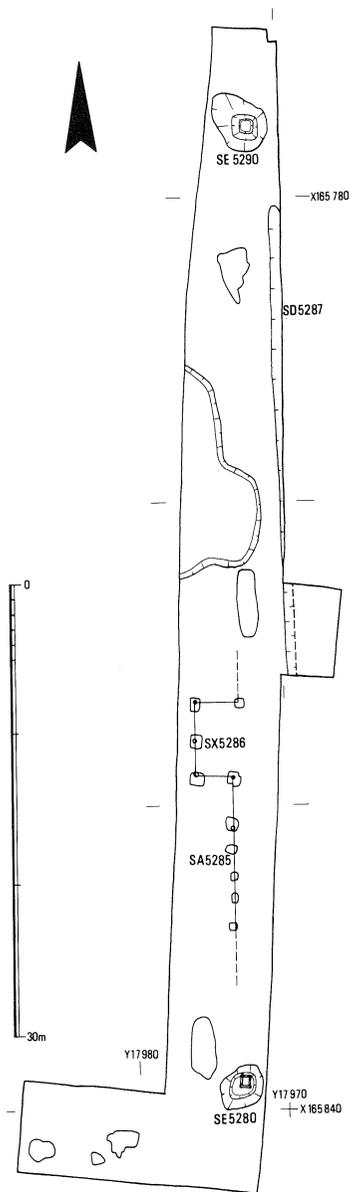
（1986年12月～1987年1月）

この調査は国道165号線榎原バイパスの建設工事に伴う発掘調査であり、同バイパス関連の調査としては第8次目にあたる。今回の調査は第43次調査地（概報15）の北側で国鉄桜井線から国道165号線にいたる約100mの区間が対象となった。同地は右京二条三坊と一条三坊にあたる。調査は東西7m・南北77mの調査区を設定し、南端と中央に拡張区を設けて行った。調査区の層序は、上層から耕土・床土・暗褐色粘質土・黄褐色粘質土の順で、遺構は黄褐色粘質土の上面で検出した。

検出した主な遺構は溝・塀・井戸・土坑である。調査区東端および中央拡張区で検出した南北溝SD5287は西二坊大路西側溝に想定できるが、削平がはなはだしく、底部0.1m程度が残存するのみである。南北塀SA5285は5間分検出したが、柱間は1.5～1.8mと不揃いである。SD5287の西約4mに位置し、右京二条三坊東北の坪の東を区画する塀と考えられる。SA5285の北に接する



第19図 右京二条三坊周辺調査位置図



第20図

第52次調査遺構配置図（1：500）

80はSA 5285の南延長線上に、また、SE 5290はSD 5287の北延長線上に接して存在する。さらに今調査では未検出であるが、西約100mの第41—16次調査（概報15）で検出した一条大路南側溝の位置から想定すると、一条大路幅が約15mであればSE 5290は大路の路面上に、幅約9mであれば北側溝に接して立地する。このように、2基の井戸はその占地に大きな問題が残るのである。

SX5286は「コ」の字状の配置をとり、柱間は2.4m、SA5285にとりつく門状の施設とも考えられる。塀は削平のため、SX5286以北では検出できなかった。調査区南端で検出した井戸SE5280は、二段の掘形を有し、上段は一辺約3m、下段は一辺約1.8m、深さ2.1mの規模である。井戸枠は下段掘形の北に偏して存在している。井戸の構造は特異なもので、最下段に井籠組の一辺約0.8mの枠組み、その四隅には枘穴があり、井戸枠を支える柱が立っていたと想定できる。井戸枠は一辺0.6m・高さ0.5mの最下段が残存し、井戸枠内には拳大の玉石が充填されていた。調査区北端で検出した井戸SE5290は不整形な掘形の中央部に径1.7mの2段掘形をもつものである。井戸枠はほとんど抜き取られていたが、一辺0.8m程度の縦板組の井戸であったと考えられる。しかし、井戸枠は検出面下1.5mまでしか存在せず、それ以下は素掘りであるため、井戸の改修が行われたものと考えられる。SE5280・5290からは飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器が多量に出土している。

まとめ 今回の調査で検出した主な遺構は西二坊大路の西側溝SD5287と、2基の井戸SE5280・5290である。2基の井戸は出土土器からみて、藤原宮期

に存在したことは明確である。しかしながらSE52

6. 右京十一・十二条四坊の調査（第54次）

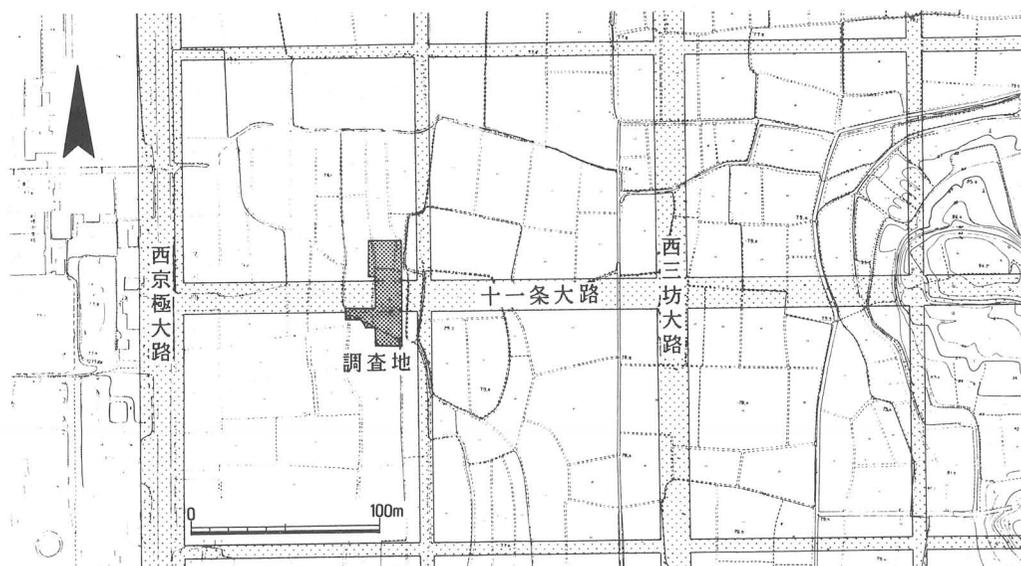
（1987年4月～6月）

この調査は病院新築の事前調査として橿原市石川町で行ったものである。調査地は右京四坊の西部にあって十一条と十二条の境を含み、十一条大路をはじめ京に関連する遺構の存在が予想された。調査は東西14m・南北53mの調査区を設定し、進行に伴って2ヶ所で西方に拡張区を設けて行った。

調査地東半の層序は単純で、表土の直下が花崗岩質の地山である。中央から西に向かって地山が傾斜し、その上に整地土の暗褐色砂質土がのる。南端部・西端部だけはもと水田に利用されており、現地形でも一段下がっている。

検出した遺構はほとんどが近～現代の穴や溝だが、奈良時代以前と考えられるものに、掘立柱建物1、同堀2、土坑1、溝1がある。いずれも地山面ないし暗褐色砂質土面で検出した。藤原京条坊にかかわる遺構は見つからず、十一条大路の存否は確定できなかった。

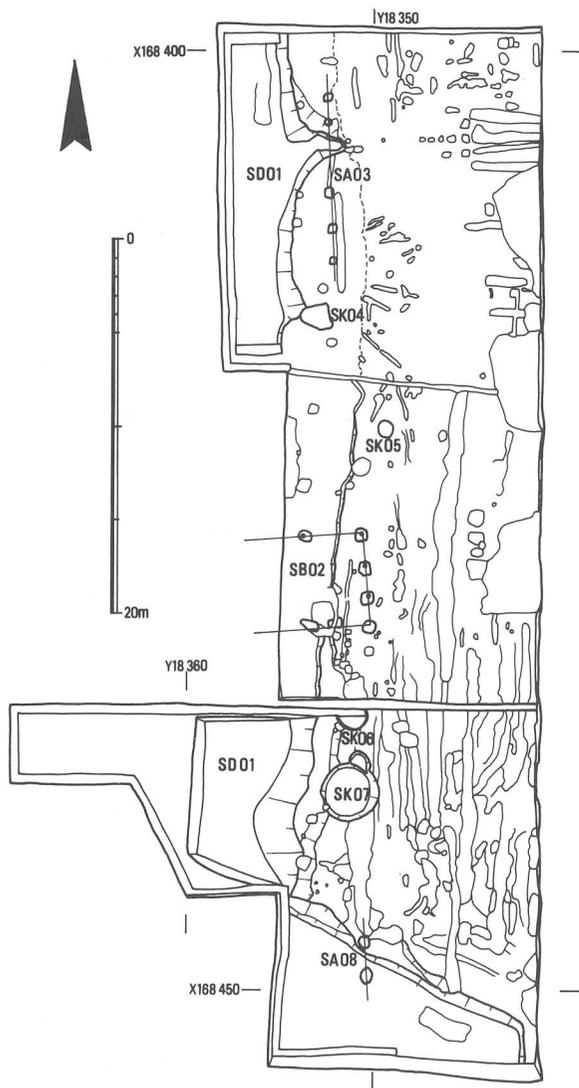
遺構 建物SB02は調査区中央西側でその東端を検出した。桁行1間（3.0m）以上・梁行3間（4.8m）の東西棟と考えられる。柱掘形は一辺約0.7mで、径約



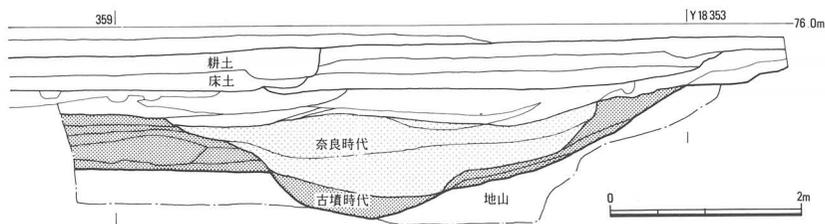
第21図 右京十一・十二条四坊周辺図

0.2mの柱痕跡が残るものがある。建物の位置が十一條大路想定位置にあたること、座標北に対して北でやや西に振れ、東妻が古墳時代の包含層である黒褐色土面で検出されたことから、藤原京の時代の建物とは考えがたい。SA03は調査区北部西寄りにある南北塀で、6間分（10.7m）を検出したが、北から4個目の柱穴は失われている。SB02と振れを同じくするので同時期のものであろう。SK04はSA03の西で検出した三角形の土坑で、時期は不明である。SK05はSB02の東北で検出した円形土坑で、径0.8m、深さ0.76mである。底は丸く、内部には古墳時代の甕片・高杯がつまっております、あるいは甕棺かもしれない。SK06はSB02の南にある円形土坑で、径1.5m、深さ0.8m以上である。井戸の可能性もあるが、浅く水が涌いた形跡もない。時期は不明である。SK07はSK06の南で検出した円形の土坑である。内部に柱状の木が2本倒れ込んでおり、井戸およびその屋形かと思われたが、深さ約1mと浅く、井戸とは見なし得ない。埋土には小型丸底・高杯をはじめとする多数の布留式土師器が含まれていた。SD01は発掘区の西部を縦断する南北溝である。発掘中は西側の肩を確認できず、地山の傾斜面に堆積した土層なし幅の広い自然流路であると考え

ていたが、断面観察の結果、



第22図 第54次調査遺構配置図（1：400）



第23図 SD01土層図(1:80)

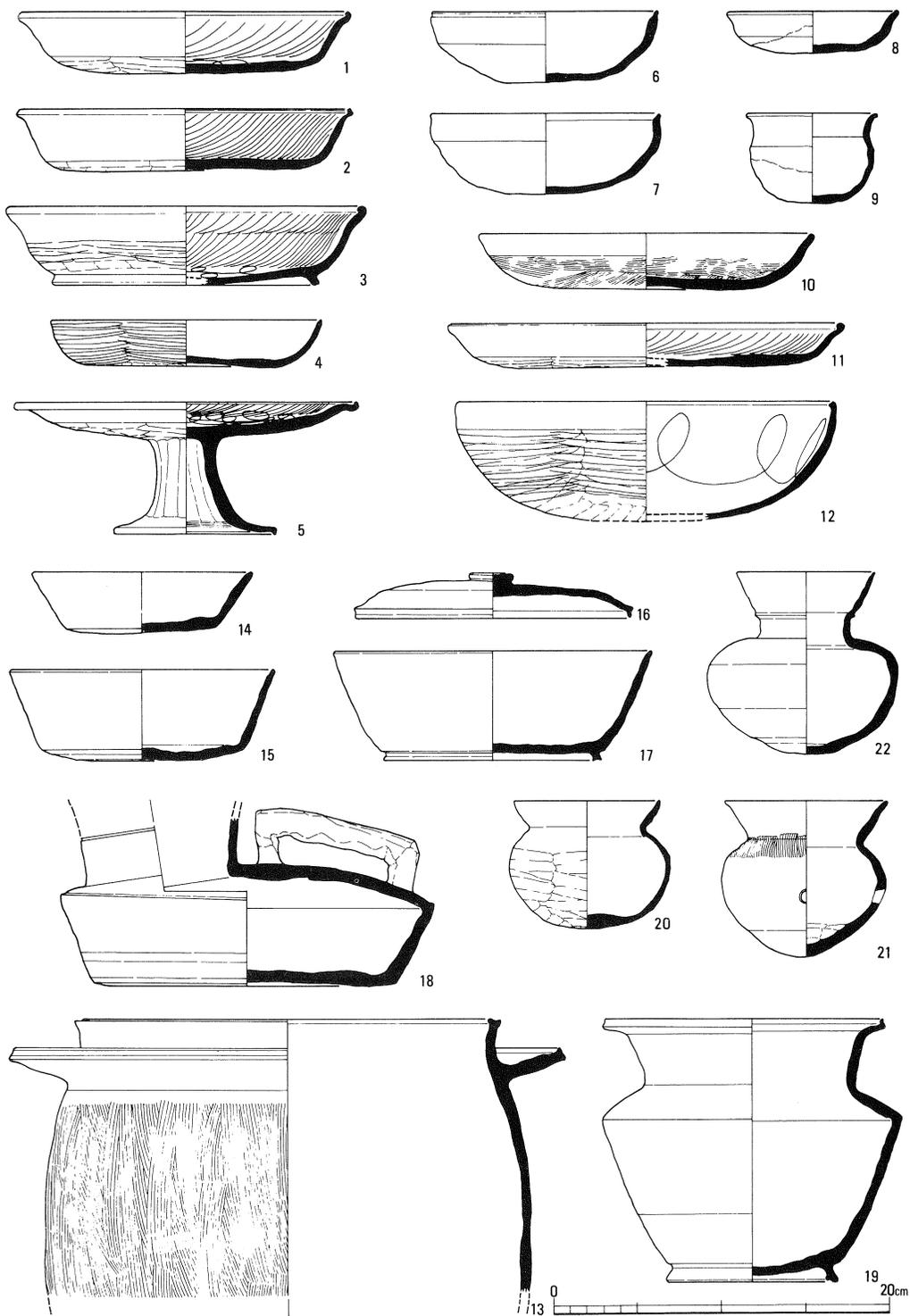
地山傾斜面に古墳時代の土が堆積し(自然堆積か人工的な整地かは不明)、奈良時代になってその上から溝を掘り込んだものであるとが判明した。溝の幅は4.4m、深さは1.3mで、北流する。

遺物 土器・施釉陶器・土製品・瓦・金属製品・石製品・木製品など多様な遺物が出土した。土器は弥生時代から近世に及ぶ時期のものが整理箱に約70箱出土した。その大半は藤原宮期から奈良時代前半にかけての土師器・須恵器で、主に南北溝SD01から出土した。ここでは、SD01と古墳時代の土坑SK07(21~22)出土の土器を一部図示した(第24図)。SD01からは大量の平城宮Ⅱ・Ⅲの土器に混じって、7世紀後半から藤原宮期にかけての土器が少量出土した。平城宮Ⅱ・Ⅲの土器では圧倒的に土師器の出土量が多く、その8割を占める。供膳・貯蔵・煮沸形態の土器がともにあり、煮沸形態の土器の中では土師器罎釜2点(18)の存在が注目される。また、SD01からは土師器や須恵器の底部外面に「川桁」、「川上」、「吉□」と墨書した例を含めて6点の墨書土器のほか、製塩土器・円面硯・須恵器蓋の転用硯・完形品を含む土馬十数個体が出土した。SK07出土の土器には、小型丸底壺のほかに高杯・甕・壺などの土師器が数十個体あるが、須恵器は図示した壺のみである。施釉陶器には緑釉椀と灰釉壺があり、いずれも包含層から出土した。

瓦は丸・平瓦が整理箱に一箱分出土した。いずれも奈良時代と考えられ、付近に奈良時代の寺院跡の存在が予想される。

金属製品には、中世の小溝から出土した現存直径3.2cmの小型銅鏡のほかに鉄釘、木製の柄が残る鉄製刀子がある。

石製品には石鏃1、砥石7、剥片刃器2がある。



第24図 出土土器 (SD01 土師器1~13, 須恵器14~19; SK07 土師器20・21, 須恵器22)

7. 紀寺跡寺域東南部の調査（1987—1次）

（1987年8月～9月）

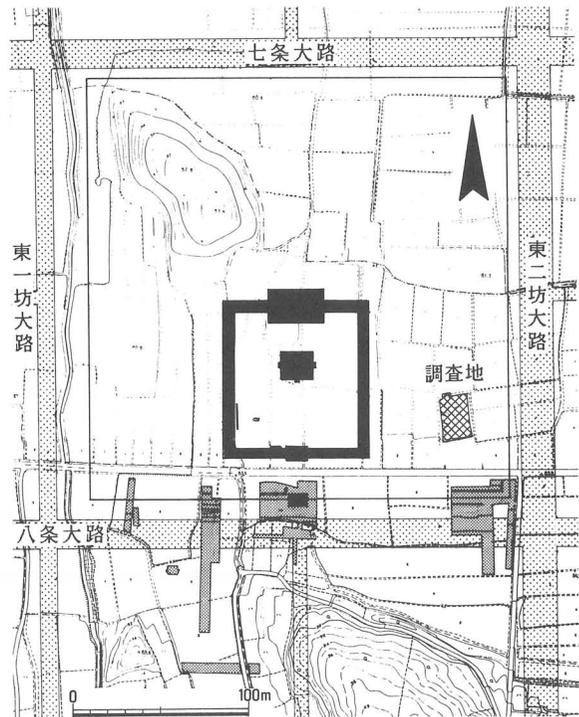
明日香村小山に所在する紀寺跡は、平城京外京の紀寺の前身寺院と考えられており、1973年以降の県営明日香緑地運動公園建設に伴う調査によって、その寺域は藤原京左京八条二坊全域の四町を占めると推定されている。

今回の調査は、寺域内東南部の水田改良工事の事前調査として実施した。調査地の基本的な層序は上から、耕土・床土・灰褐色砂質土・褐色砂質土・灰褐色砂礫・黄灰色細砂・青灰色細砂の順である。遺構は褐色砂質土上面で検出した。調査区の南半では褐色砂質土が薄く、灰褐色砂礫および黄灰色細砂が露出する。遺構検出面以下の土層には、自然木と少量の弥生時代後期の土器が含まれている。調査地は飛鳥川右岸に沿って点々と連なる丘陵の東裾に位置し、東側の香久山との間にできた谷地形の低湿地に立地することを示している。

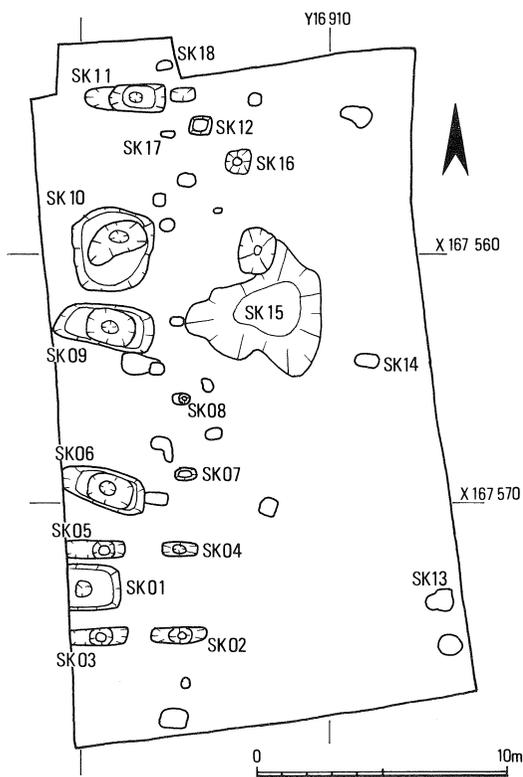
遺構 主な遺構には大小16基の土坑があり、他に浅い窪みや小穴、小溝がある。

主な土坑の規模や出土遺物等は第1表に記したとおりである。

SK01・06・09・11はほぼ同規模の東西に長い大型土坑で、東端をそろえるように4～6mの間隔で南北に並ぶ。SK02～05はSK01の両側に沿って2基以上ずつ規則的に配置された小型の土坑である。SK06・11のまわりにも、それぞれ小型土坑のSK07やSK17・18があるため、大型土坑1基と小型土坑数基で一組になっていたと考えられる。これらの大小の



第25図 紀寺跡周辺図



第26図 紀寺1987-1次調査遺構配置図(1:300)

土坑は長辺の壁が垂直に近く、短辺の壁が緩やかな船底形をなし、底の中央が一段丸く凹む点で相似した形態をもち、その埋土の状況や遺物の種類にも共通点が多い。

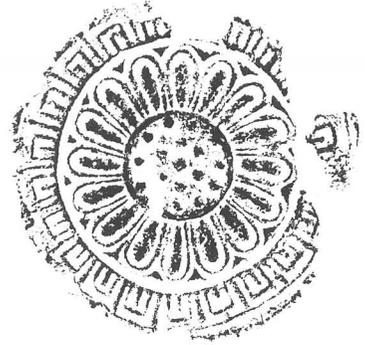
土坑の埋土はいずれも3層に分けられる。下層は砂・木の葉の間層を数層挟んだ青灰色粘土で、比較的長期の堆積層とみられ、木製品と少量の銅滓をふくむ。中層は短期間の堆積層で、銅滓や木炭などの鑄銅関係遺物を多く含む。上層は炭化物や瓦を含む暗褐色粘土の埋立土である。

土坑SK10は大型で下半は東西方向の長方形である。上半は不整形な

遺構	規模(単位m) 長辺×短辺×深さ	鑄銅関係遺物	土器・瓦 (<u> </u> は漆容器)	石製品・木製品・木簡
SK01	1.8×1.9×1.2 以上	銅滓、銅屑、木炭、 炉床、埴埴	須恵器長頸壺・皿 瓦片	鋤未成品 木簡「□□可三万呂」
SK06	2.9×1.6×1.1 以上	銅塊	土師器皿・杯	凝灰岩 木簡「□□国□□」
SK09	3.6×1.8×1.1	銅滓、銅屑、焼土、 炉床	土師器甕・鉢 隅切平瓦	琴柱、曲物
SK10	3.5×3.0×1.3	鞆羽口、炉床、銅 滓、焼土、金箔	土師器杯・甕・壺 須恵器鉢・碗・平瓶・ 長頸壺・横瓶 軒丸瓦、面戸瓦	漆篋、漆壺木蓋、刀子柄、 棒状木製品
SK11	2.2×1.1×1.4	銅板、湯口、銅滓、 炉床、木炭	土師器甕、須恵器鉢、 凸面布目平瓦	木簡「□下毛野人□」 木簡「□定□」
SK12	0.9×0.8×0.8		土師器甕、須恵器壺、 軒丸瓦、隅切平瓦	焼け石 棒状木製品
SK02	2.1×0.5×0.5	転用埴埴		
SK03	1.4×0.7×0.7	銅滓、埴埴	須恵器甕・杯	木片
SK04	1.4×0.5×0.3	転用埴埴、焼土		
SK05	1.8×0.7×0.7	炉床、転用埴埴	瓦片	

第1表 検出主要土坑

し、遺物に大量の漆容器の壺がある点で他と異なる。また、SK12は柱堀形に似た方形土坑で、火を受けた石や、周縁にいわゆる雷文を配した細弁の軒丸瓦（第27図）が出土した。ともに他の土坑と同様の堆積状況である。



第27図 出土軒丸瓦（1：4）

これらはすべて一体の土坑群と考えられる。

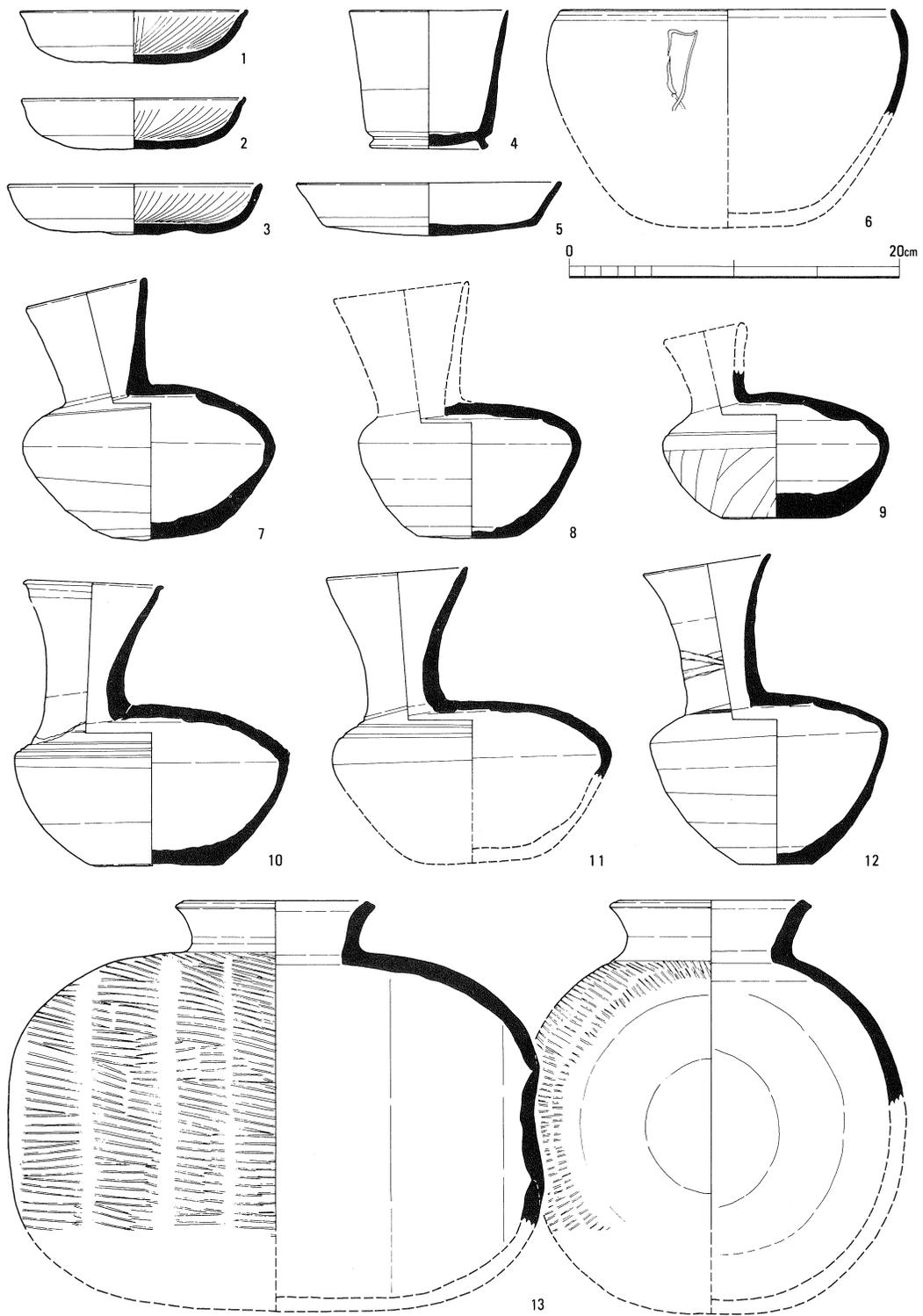
遺物 鋳銅関係遺物やSK10の漆容器、SK01等の木簡が注目される。鋳銅関係遺物には、

炉床・フイゴ羽口・埴塙などの鋳込みの用具のほか、湯口やバリの屑など仕上げ段階の廃材があるが、製品は見られない。廃材の大きさによれば、製品はさほど大きな物ではない。

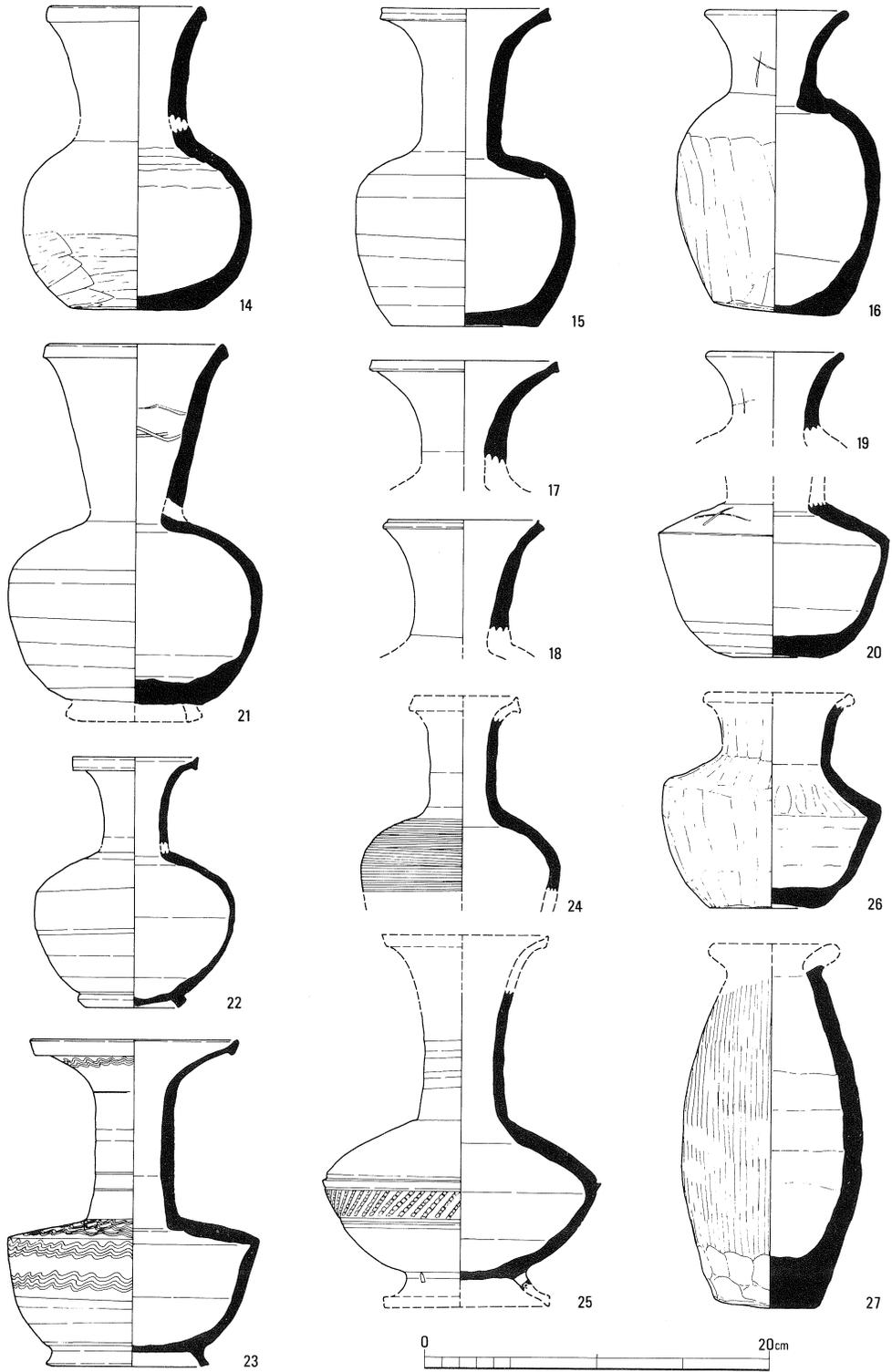
SK10中層出土の漆容器には、須恵器平瓶・長頸壺・短頸壺・横瓶や粗製の土師器壺（第29図26・27）など多くの器種がみられ、それぞれ器形の上でも多様なものである。壺類にはいずれも、口縁及び体部上半で打ち割って、中の漆を搔き出した痕がみられる。また、木や藁を芯にして布を被せた栓や漆篋も伴出することから、漆工房の操業終了時に残った漆を集め、不用物を投棄したと考えられる。伴出した杯類（第28図1～5）は藤原宮期かやや古い時期で、漆は付着せず、底部に墨書や針描きの記号がある。

まとめ 今回検出した土坑群は紀寺造営に関わって掘られ、その終了時に資材道具を投棄したものである。SK10からは僅かながらも金箔が出土しており、鋳銅・漆工・箔工が一体として作業した工房の廃棄に伴う土坑と理解される。その時期は出土土器から藤原宮期までと考えられる。

紀寺の造営・廃絶の時期は不明な点が多い。軒瓦等から金堂等の中心伽藍は7世紀後半代に、南門や大垣は藤原京の造営と併行して整備されたと考えられ、金堂跡に瓦窯の作られる奈良時代末～平安時代初めには廃絶していたと見られている。寺域外西南部でも、今回の土坑群と酷似した内容の遺物を含む7世紀末～8世紀初めの土坑群が検出されている。今回検出した土坑群はそれらとともに、藤原京の造営に伴う寺域内外の整備に関わるものと考えられよう。



第28図 紀寺出土土器① (SK01 5 ; SK10 1~4・6~13 ; 土師器1~3 ,
須恵器4~13 ; 漆壺7~13)



第29図 紀寺出土土器② (SK10 14~27; 土師器14・26・27, 須恵器15~25; 漆壺14~27)

8. その他の調査概要

A. 右京二条一坊の調査（第54—6次）

（1987年7月）

この調査は駐車場造成に伴う事前調査として橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は第48—8次調査区（概報17）の南にあたる。調査は南北4m・東西18mの調査区を設けて行ったが、中世の小溝・時期不明の自然流路を検出するにとどまった。

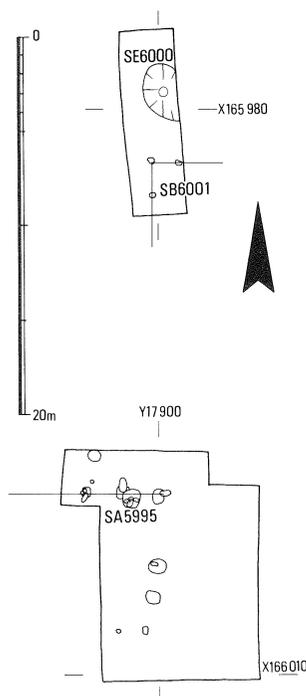
B. 右京二条二坊の調査（第54—11次）

（1987年9月～10月）

この調査は集合住宅新築に伴う事前調査として橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は宮西北隅に北接する右京二条二坊にあたり、北側70mには長谷田土壇が存在する。調査は東西8m・南北12mの南区と東西3m・南北10mの北区を設定して行った。

検出した主な遺構は塀・井戸・土坑である。南区の北側で検出したSA5995は2間以上の東西塀で柱間は2.1m等間である。北区中央のSE6000は素掘りの井戸である。井戸からは藤原宮期の土師器・須恵器・製塩土器が出土している。SB6001は掘形の形状から中世の建物と考えられる。

今調査地に西接する右京二条三坊では大規模な建物群が知られているが、それに比して遺構密度は低いものである。また、井戸SE6000は坪のほぼ中央にあり、宅地の使用方法としても変わった配置である。調査地北側の長谷田土壇の位置づけと、宅地利用の方法を知るうえでも周辺の調査の進展がまたれる。



第30図 第54—11次調査
遺構配置図（1：400）

C. 右京七条二坊の調査

(1) 第48—18次

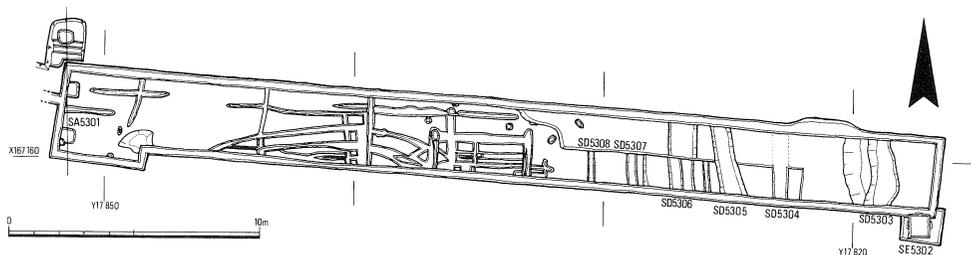
(1987年2月～3月)

この調査は橿原市飛驒町で道路建設の事前調査として行ったものである。調査地は藤原宮西南部の南約120mで、右京七条二坊に当たる。調査は東西35m・南北3.3mの調査区を設けて行った。層序は上から水田耕土・床土・灰褐色砂質土で、その下に西半部では茶褐色粘質土、東半部では灰褐色砂質土の遺構面がある。東半部は東南から西北方向への弥生時代の旧流路内とみられる。

検出した主な遺構は藤原宮期の南北塀、平安時代の溝・井戸・小穴群等である。南北塀SA5301は2間分を検出し、柱間は南から1.9・2.1mである。南北大溝SD5303は幅4mを検出したが、東岸は調査区外である。深さ0.6mで、10世紀頃の溝とみられる。井戸SE5302はSD5303の底で検出した。一辺0.9mの縦板組で、内側から横棧を組合わせて井戸枠を支えている。溝底からの深さは1.3mである。井戸内から9世紀中頃の土器が出土した。調査区東半の南北溝SD5304～5308と、中央部の小穴群は10～11世紀のものである。

主な出土遺物は、SD5303から灰釉陶器・製塩土器・瓦、SE5302から黒色土器・墨書土器・製塩土器、SD5306から緑釉陶器、小穴群から灰釉陶器、小溝中からフイゴ羽口、整地土から円面硯等が出土している。

調査区東端は、第37—6次調査（概報14）で検出した西二坊坊間路東側溝に相当する南北大溝の西岸想定位置であるが、後世の溝SD5303でこわされて、確認できなかった。南北塀SA5301は、西隣の第45—12次調査（概報17）でも伴う建物等がなく、性格は不明である。



第31図 第48—18次調査遺構配置図（1：300）

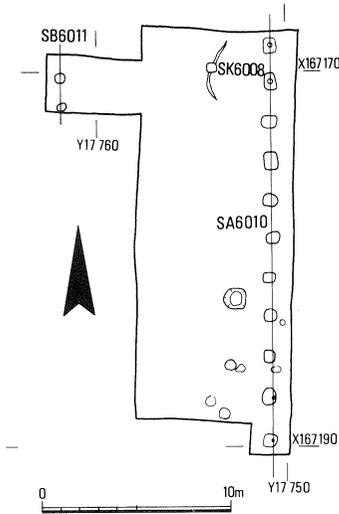
(2) 第54—13次

(1987年10月)

この調査は駐車場造成に伴う事前調査として、橿原市飛驒町で行ったものである。調査地は右京七条二坊東北坪の中心部にあたる。調査は東西9m・南北21mの調査区を設けて行った。検出した主な遺構は建物・塀・土坑である。

調査区東端で検出した南北塀SA6010は2.1m等間で10間分確認した。南端の2箇の柱穴には柱根が残存していた。拡張区で検出した2箇の柱穴は柱間1.5mで、おそらく建物であろう。北端で検出した土坑SK6008からは7世紀後半の土器が出土している。

南北塀SA6010は周辺での条坊遺構との関連からみると、右京七条二坊東北の坪の東西二等分線上にあたり、坪を東西に画する塀であったと推定でき、半町の宅地割を確認できたものと考えられる。



第32図 第54—13次調査
遺構配置図 (1:400)

(3) 第54—10次

(1987年9月)

この調査は都市計画道路建設工事に伴う事前調査として、橿原市飛驒町で行ったものである。調査地は右京七条二坊にあたり、七条条間路の存在が予想された。調査は東西2m・南北12.5mの調査区を設けて行ったが、沼状の堆積とそれに切り込む、14世紀前半の土坑を検出するにとどまった。

D. 右京八条一坊の調査

(1) 第48—19次

(1987年3月)

この調査は市営住宅建替に伴う事前調査として橿原市上飛驒町で行ったものである。調査地は右京八条一坊にあたり、朱雀大路も想定される場所である。調査は幅6m、東西29m・南北24mのL字状の調査区を設定して行い、西端と

南端をそれぞれ拡張した。

検出した主な遺構は調査区南端で検出した、近世の土坑・溝である。また、調査区西端は西へむかう崖であるが、崖上面で近世の整地土を検出した。朱雀大路など、藤原京関係の遺構は市営住宅建設時に削平されていた。

(2) 第54—3次

(1987年5月)

この調査は倉庫新築に伴う事前調査として橿原市上飛驒町で行ったものである。調査地は右京八条一坊にあたる。調査は東西1.4m・南北7.3mの調査区を設けて行ったが、河川の堆積層を確認するにとどまった。

E. 右京九条三坊の調査

(1) 第54—7次

(1987年8月)

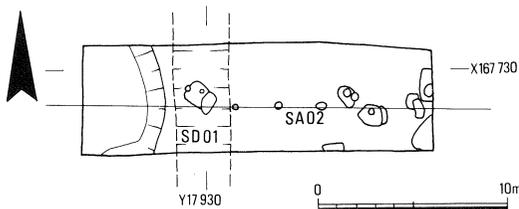
この調査は宅地造成に伴う事前調査として橿原市城殿町で行ったものである。調査地には九条大路が想定された。調査は幅1.5m・長さ6mの調査区を2ヶ所設けて行ったが、九条大路は検出できなかった。

(2) 第54—18次

(1987年11月～12月)

この調査は橿原市城殿町の奈良県技能開発センターの校舎新設に伴う事前調査として行った。調査地は右京九条三坊にあたる。調査は西二坊大路の検出とその周辺の宅地利用状況の把握を目的として、敷地南の西二坊大路西側溝想定位置に東西32m・南北7mの南調査区と、敷地中央部の西二坊大路東側溝想定位置に東西10m・南北3.2mの北調査区を設定して行った。

南調査区は、調査区東側の西側溝想定位置では上面から盛土・耕土・床土・灰色砂の層序となっている。灰色砂には古墳時代遺物（土師器・須恵器・焼けた木片）などを包含しており、藤原宮期の遺構面は認められなかった。調査区西側では、灰色砂が黄褐色粘土に移行し、地山となっている。床土と黄褐色粘土層の間には暗灰褐色砂質土・暗褐色土が挟在するが、いずれも中世の整地土



第33図 第54—18次調査
北区遺構配置図(1:400)

である。暗褐色土面では数個の柱穴を検出したが、検出面・掘形の規模等より、中世の遺構の一部と考えられる。

北調査区では、層序は耕土・床土・黄灰褐色砂質土の順になっている。黄灰褐色砂質土面は後世の削平を受けて

おり、この面で堀および柱穴を検出した。いずれの遺構も削平により、底部付近が残存した状況で、中世の所産と考えられる。

南北大溝SD01は調査区西端から約3.4mに位置し、その西肩は近時の攪乱によって壊されていた。溝幅は検出面で2.1mを測り、溢れた状況を示している。溝本来の幅は約1.5mと考えられる。深さは北側で0.1m、南側で0.3mを測る。溝内の堆積土は炭の混じる暗褐色土で、藤原宮期の土師器・須恵器が多量に出土した。SD01は検出位置・規模・出土遺物等より、西二坊大路東側溝と考えられる。

堀SA02は柱間1.1~1.2mで、調査区東側にまで続いている。一部は南北大溝の東肩部でも検出されており、南北大溝より新しい堀である。その他の柱穴も南調査区検出の柱穴と相似し、何らかの中世の遺構と考えられる。

F. 右京九条四坊の調査(第54—8次)

(1987年8月)

この調査は宅地造成に伴う事前調査として、橿原市城殿町で行ったものである。調査地は右京九条四坊にあたり、九条大路の存在が予想された。調査は東西6m・南北30mの調査区を設けて行った。

検出した主な遺構は溝・堀・土坑である。調査区南端で検出した東西溝SD2225は幅1.3m、深さ0.3mあり、下層は砂層で流水の痕跡を残し、上層は粘質土で埋め立てられた様相を示している。位置的にみて、九条大路の南側溝と考えられる。

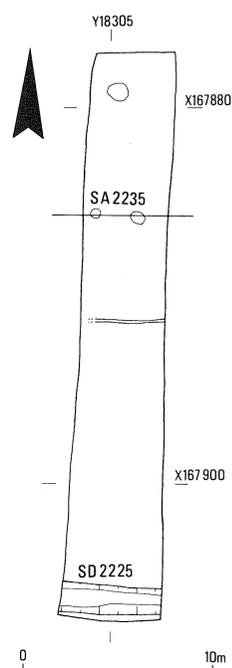
東西堀SA2235は柱間2.4mの1間分を確認しただけだが、右京九条四坊東南

の坪の南側を区画する塀と考えられる。柱穴は現状で0.2mと浅く、数十cmの削平が考えられる。

九条大路はすでに左京の2箇所調査で検出している。一は大官大寺講堂下層のSD517が北側溝（概報10）に、二は左京九条三坊でのSD50が南側溝（概報11）と考えられている。これらと今回検出したSD2225を勘案すれば、九条大路SF2230は側溝心心距離で幅約15mと推定できる。今調査区でも、SA2235の位置からみて、幅は約15mと推定できる。

遺物はSD2225から藤原宮期の土師器・須恵器・土馬・円面硯が出土した。北端の土坑からは7世紀後半代の土器が出土している。

九条大路は藤原京条坊で確認した最も南の道路遺構である。



第34図 第54—8次調査
遺構配置図（1：400）

G. 右京十一条四坊の調査（第54—2次）

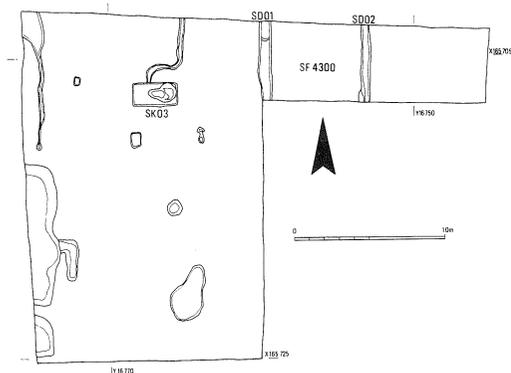
（1987年4月）

この調査はマンション建設に伴う事前調査として橿原市石川町で行ったものである。調査地は東西10m・南北8mの調査区を設定して行ったが地表下2.5mまで沼状の堆積で、予想された下ツ道・十一条条間路は検出できなかった。

H. 左京二条三坊の調査（第54—17次）

（1987年12月）

この調査は店舗新築工事に先立ち、橿原市出合町で行ったものである。調査地には東三坊坊間路の存在が推定された。調査は坊間路及び関連遺構の確認を目的として、東西16m・南北23mの調査区とその東北に接して東西15m・南北5mの小調査区を設けて行った。調査区の土層は耕土・床土・灰色砂質土・茶褐色土の順で、遺構は地表下0.5m前後にある茶褐色土の上面で検出した。



第35図 第54—17次調査遺構配置図（1：500）

検出した主な遺構には、東三坊坊間路と土坑があり、その他に時期不明の小穴や中世の小溝がある。東三坊坊間路SF4300は、調査区の東側でその東西両側溝を検出した。西側溝SD01は幅0.9m、深さ0.25m、東側溝SD02は幅0.7m、深さ0.25mで、両側溝は心心距離で6.7mを測る。こ

のSF4300は当調査地の南約1.3kmの地点でも検出しており（第46・50・53次調査、概報16～18）、ここでは側溝の幅0.6～1.1m、深さ0.4m前後、両側溝の心心距離が7.3m強であることが確認されている。SK03は発掘区北寄りで検出した東西3.0m、南北1.5m、深さ0.6mの方形の土坑で、西辺には幅約0.2mの板材が残っていた。本来は四周を桝板で囲んでいたものと考えられる。埋土から藤原宮期の土器が出土するものの、性格は不明である。

今回検出した東三坊坊間路は、当初の予想位置より東に偏っていた。先述の第46次調査等で検出した道路遺構と結ぶ線は、座標北に対し約6分北で西に振れるが、藤原京の他の条坊の振れと比較すると相当に小さい値である。また、当調査地の西方で確認された東二坊坊間路（第56次調査・本概報）との心心間距離も270mを超え、同様に東に偏るきらいがある。ただし、遺構の状況からこの2条の溝が坊間路の両側溝である可能性は高い。また、東西30mにわたる調査範囲内でこれに代わる条坊遺構もない。今のところは坊間路と考え、今後の検討に委ねたい。

I. 左京七条三坊の調査（第54—14次）

（1987年10月）

この調査は地区集会所建設に伴う事前調査として、橿原市木之本町で行ったものである。調査地は左京七条三坊にあたり、調査は東西3m・南北7mの調

査区を設けて行った。

検出した主な遺構は東西棟建物と土坑である。建物は身舎部分の2箇所の柱穴を検出したにとどまる。建物規模は不明であるが、一辺約1mの掘形、径0.3mの柱痕跡を有するため、かなり大規模なものであると推定できる。土坑からは製塩土器を含む、6世紀前半の土器が出土している。

J. 左京八条一坊の調査（第54—12次）

（1987年10月）

この調査は資材置場造成に伴う事前調査として、橿原市上飛驒町で行ったものである。調査地は藤原宮の真南にある日高山丘陵の頂上付近に位置し、左京八条一坊西北の坪の西隅にあたる。調査は東西14m・南北1mの調査区を設けて行った。約0.5mの表土層を除去すると、花崗岩風化土の地山となる。地山面は調査区の西端で急に傾斜し、旧地形の様子が明かとなった。検出した遺構は現代の小土坑だけで、藤原宮期その他の遺構は検出できなかった。

K. 左京八条三坊の調査（第54—5次）

（1987年7月）

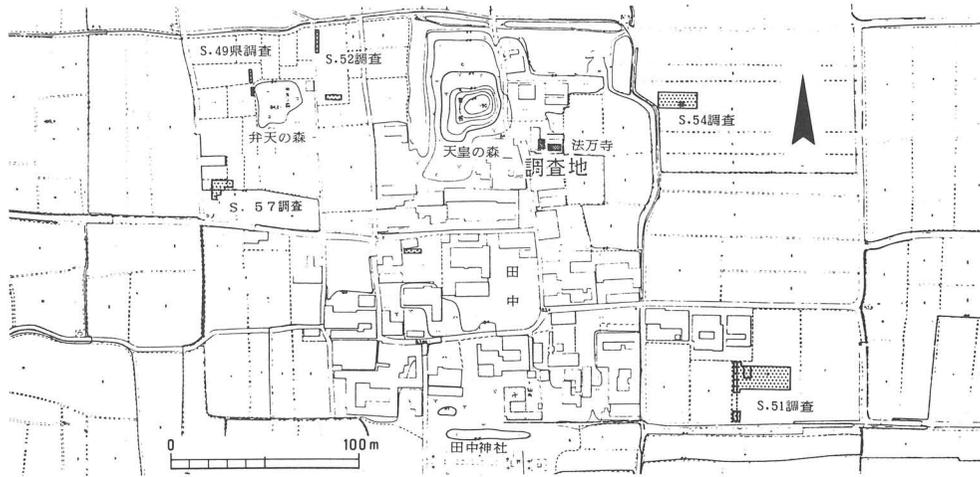
この調査は住宅建設に伴う事前調査として、明日香村小山で行ったものである。調査地は東三坊坊間路の想定位置に近接する。調査は東西9m・南北4mの調査区を設定して行ったが、なんらの遺構も検出できなかった。

L. 田中廃寺1987—1次

（1987年11月）

この調査は法万寺本堂改築に伴う事前調査として、橿原市田中町で行ったものである。調査地付近は田中廃寺あるいは田中宮跡と想定されている場所であり、関連した遺構の検出が予想された。

調査は東西2.8m・南北3.0mの西調査区と、東西7.0m・南北3.0mの東調査区を設けて行った。西調査区の層序は、上から表土（現本堂に伴う造成土）・炭混



第36図 田中廃寺周辺調査位置図

暗褐色土・焼土層・炭焼土混黄褐色山土・山土混焼土層・明黄褐色山土・暗灰粘質土・暗灰褐色粘質土・灰褐色砂質土の順である。遺構は炭焼土混黄褐色山土・明黄褐色山土・灰褐色砂質土上面で、それぞれ小穴・小土坑・小溝等を検出した。遺物は、炭混暗褐色土から暗灰褐色粘質土まで、いずれも14世紀前半の土師器の小皿が出土している。従って、比較的短い間に火災と整地がくりかえされたものとみられる。また、下層遺構の確認のために、一部を掘り下げたが、遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。東調査区の層序も西調査区と基本的に同じである。東調査区では、中世の環濠の西肩を検出した。環濠は幅5m以上、深さ2m以上の規模である。環濠の上端は西区で検出した山土によって覆われていることから、14世紀前半の整地の過程で埋め戻されたものとみられる。

今回の調査では中世の遺構を検出しただけで、田中廃寺・田中宮跡に関連した遺構を確認することはできなかった。しかし、今回の調査でも、7世紀代の瓦が少量出土している。今後の周辺の調査によって田中廃寺・田中宮跡の実態が明らかになることを期待したい。